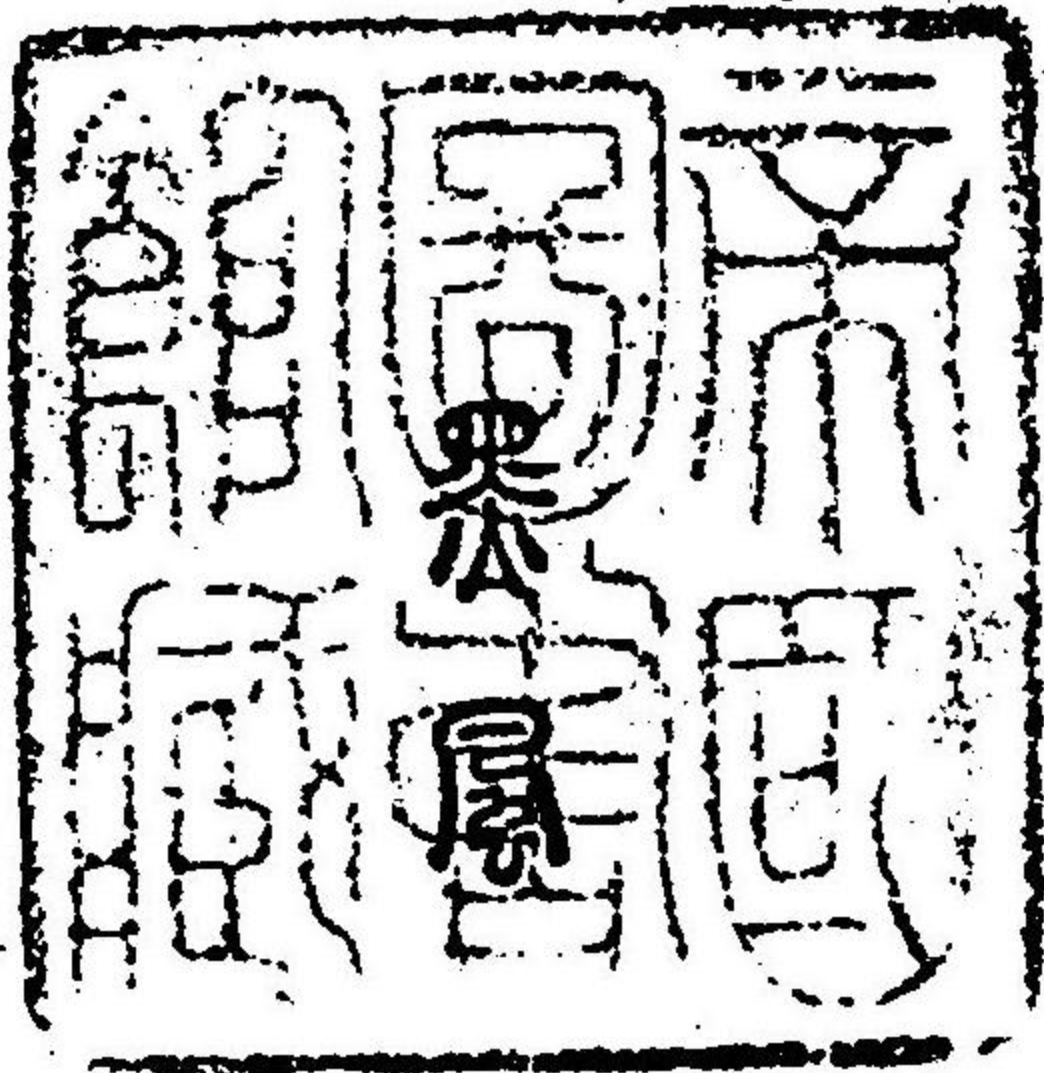
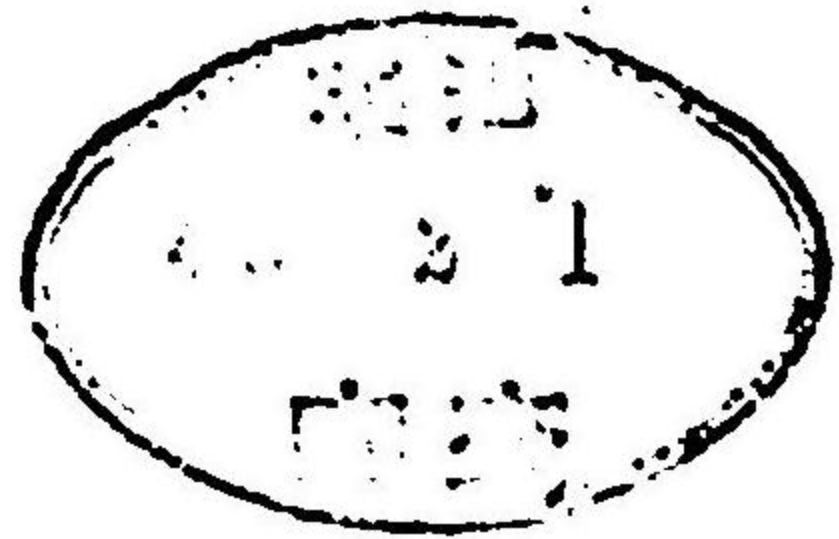


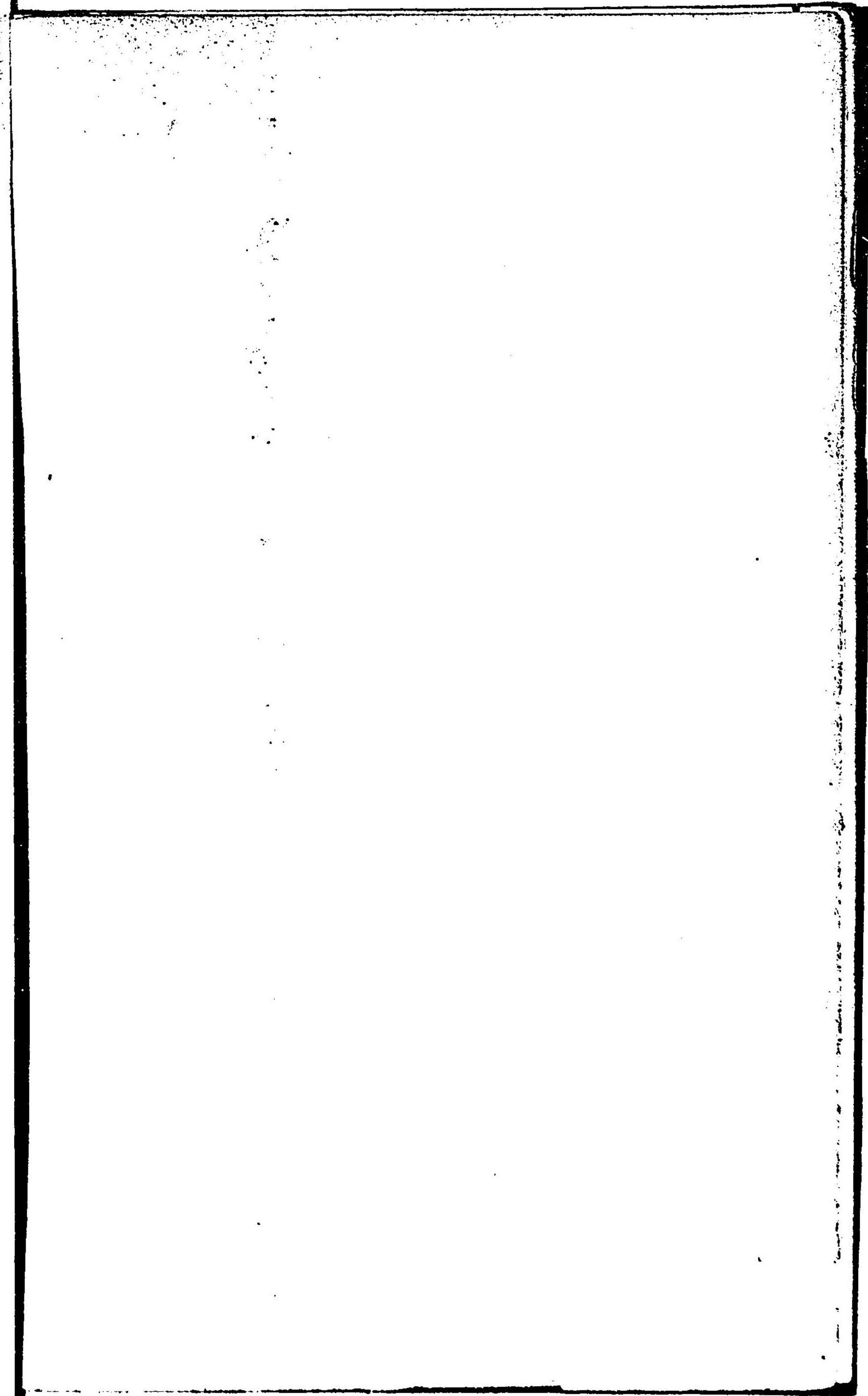
1937
1937





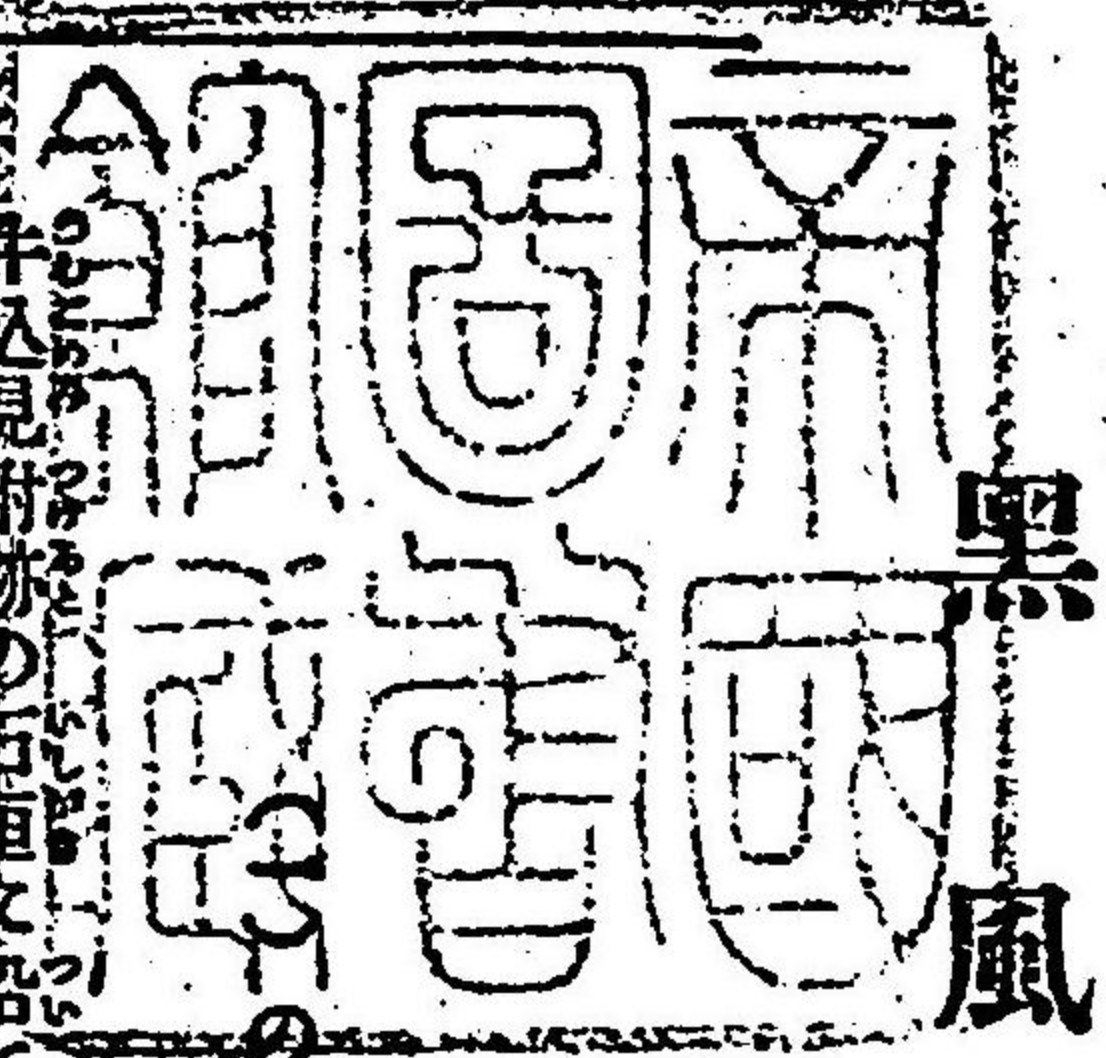
田口 紳 高







後 編



(後編)

田口掬汀著

牛込見附跡の石垣に沿って左へ、一町ばかり市ヶ谷の方へ行くと、松籠り立つ堤を前に控へ、厚い煉瓦塀を繞らした一構がある。屋敷は左程廣くはないが、密に立並ぶ木立の間に、建方に趣ある西洋館の二階が見え、掃除の届いた周圍に塵一つ落ちて居ず、椿の一叢、圓錐形に造つた目隠樹前に、奇麗に敷均した小砂利さへ、絶えず取代へるのかと思はれる。花崗石の門柱には、高藤と記した小さな標札を掲げてある。言ふまでもなく、高藤遞信書記官の父、兼春氏の邸宅なのである。

二月も既早中旬過ぎ、靖國神社境内の梅が咲いて、春の歩み日毎目に著き節であるが、世は戦争の進行に心を奪られて、粧へる櫛を訪ふ人もなく、只戦勝の號外のみ待焦れて、匆々忙々として暮して居る。

我が第十二師團の先頭隊が、既に平壤に入れりとの報達すると、人は早くも全勝を豫想して、廣い都が歡呼の聲で撼かざる夕であつた。高藤邸の二階の一室、往來に面した窓際に卓を圍んで、快活に話し合つて居るのは、歩兵少尉の軍服着けた藤太郎と、琉球紬の縮入に、兵兒帯をぐる／＼捲きにした兼夫である。

今晚酌の濟んだ處と見えて、何れも微醉の顔を電燈の光りに輝かせて、さも面白さうに語つて居る。

「併し人間の運命程不思議なものはないです」と渾美少尉は今過ぎた話の尾を取つて

「頃日もお話しした通り、貴下と云ふ恩人がなかつたら、僕は未だ結らん空想に憐んで、呆然して亞米利加に暮して居たてせう。僕は貴下の御高誼に報いる丈けても、目撃し

「ハッハ、恩人は素晴らしい」と高藤は哄笑して「恩誼は不可んよ。然ら恩誼々々と言はれると、凡夫の悲しさに遂に増長して、報酬を求めなきやならん事になる」

「無論です、求められなくとも報酬せず居られませんか」と少尉は茫爾ともせず、「有形のものゝを以てするか、無形のものゝを以てするか、夫は何とも言難るが、僕は有ゆる手段を盡して報ずる覚悟です。度々言つちや恩誼になります、僕が自己の責任を知つたのは、眞個貴下のお庇蔭で……妹の手紙で、貴下が歸朝費を送つて下さつたと知つた時、僕始めて自分の過去の無意味なのに心注ぎました。眞實です、若し貴下の刺戟、いや寧ろ威化だ……非常に大きな、力強い其威化を受けなかつたら、未だ粗漫至極な空想に耽つて、秩序のない生活を續けて、國家の大事を餘所に見て居つたに相違ない。して見ると、貴下の恩と云ふものは廣大無邊で、僕は其恩誼を蒙つて、幸く國民らしい行ひをする事が出来るのですから、何物を以てしても、又如何なる手段を盡しても、十分に報いると云ふ事が出来ません」

肩を聳かした其身の態にも、力を籠めた聲音にも、燃えるやうな其眼光にも、儼

ならぬ誠意が見える。彼は遠い海の方にあつて、仄かに祖國の大事を聞き、漫ろに血汐を沸かすに就けても、何一つ仕出来さぬ自分の身が、詰らなく且つ腹立しく思はれてならなかつた。其矢先、義氣に富み俠心に満ちた高藤の所爲を聞いて、如何して心の動かぬ故があらう。實に、憲太郎は亡父の計と一家零落の移住始末とに、先づ相漫な空想の枝葉を拂はれ、次いで、高藤が義侠の所爲に、其根を引抜かれて、今こそ中佐の遺子として、耻かしからぬ青年士官となつたのである。

「すると何ですな、僕は何物でも求むる権利があるのですね」と高藤は笑ひながら言つた。

「然うです、僕の有しとる物なら何でも……」

「如何な物でも貰へるのですな」と高藤は眼を輝かす。

「然うです、僕の方で出来るものなら、如何なる物でも捧げます」

「ちやア御令妹を下さいと言つたら如何します……」ちや姉様を貰ひ度いと言や如何しますね。然う云ふ註文を出されたら、流石に閉口するてせう。ハッハ、如何ですぞ

問てせう」

高藤は聲高に笑つたが、其笑は強ひて押出すやうであつた。憲太郎も莞爾して、

「ハッハ、奇抜な質問ぢやありません。いや頗る平凡です。お望みなら何時でも逃げませう。と言つたところが、姉妹一緒に貰ひなされる譯にや行かんてせう、何れも物を食ひますからな、ハッハ、」

「ハッハ、併し之程大きな註文はありますまい、或意味に於て、生命を貰ふのですからな」

「然うですとも！ 貴下が欲しいと仰在るなら、生命でも靈魂でも捧げるてせう。併し姉妹と云ふお話で思起しましたが、姉妹は御承知の通り始終愛慮の絶えない……非常に薄命な身の上ですから、僕、無事で歸られるなら、自分の幸福を犠牲にして、姉妹を慰めやうと思つて居ますが、萬一戦死でもしたら、定めし身の振方に困るだらうと思ふです。父や祖母が存命で居る頃は、同胞の事なんぞ何とも思はんかつたですが、歸つて来て不幸な有様を見ると、何とも言はれない哀れを感じだす、高藤さん、若

し僕が小箱に入つて歸るやうでしたら、何卒姉妹を憫んで遣つて下さい」

「承知しました」と高藤は待難ねたと言ふ風に點頭した。「僕も豫備役に居るのだから、如何なるか判明らんけれど、お姉妹の身に就いては、及ばずながら盡力します。才色兼備の御姉妹だ。設令、僕が世話を焼かないものにしても、自然に幸福になられるですよ、御心配なさらんが可い」

「有難う。然う言つて戴くと、先づ安心して行かれると云ふものです」

「行くと言ふと、明後日の出發は、大抵何時頃になりますな」

「然うです。多分夜になるだらうと思ひますが、未だ命令が下りませんから、時間は明瞭判明らんです」

「出發の時には何れも送りするが、何卒自重して呉れ給へ、僕は命預動章を貰つて呉れとは望むんぢやない、祖國の爲に、又人道の爲に、正しい戦の目的を達するやうに、正しく動いて呉れと望み度い」

高藤は昂然として言つたが、眼を轉じて硝子窓越しに、相對する牛込の高藤を見た。

左の方、星月夜の空を劃つて、眞黒に染まる築地八幡の森から、右に神樂坂を視界にして、花の如く列る提灯の光り、又、坂の中腹から深淵かけて、千點萬點の燈火流れ動く光景は、宛ら星の海を眺むるやう、耳を澄せば遠く地鳴のやうな轟きがして、其中に、勇ましい樂隊の音も交つて聞える。

「勇ましいぢやないか！」と高藤は碎けた語調で、「見給へ、市民は今から戦勝の祝意を表して居るが、僕は彼の様な祝意を表し續けて、更に大きな熱狂を以て、君の凱旋を迎へ度いと思ふ、いや僕も市民の熱狂聲裡に迎へられやう」

「行りませう、大いに行りませう」

憲太郎も情の激した面色で、シツと窓外を打眺めた。思ひは早く飛ぶ千里の彼方、荒涼たる平野の中に、砂塵を立て、馳驅する敵味方、人馬の動くさまが幻に見えて、銃砲の轟きまでも聞えるやうだ。

二人は暫し黙想に耽つた。只今、暖爐に入れた石炭が、風鳴して燃えるばかり、室は暫く閑然としたが、突然カタリと扉が啓いた。振返る高藤の前に、小腹を屈めたは

玄關番の書生である。

「川越の渥美と申す御婦人が、お目に掛り度いと申して來ました」

「渥美君御令妹が來になつた」

「妹でせうか？」と少尉は眉凝めて「名を言はんやうでしたが、如何して妹と判明
てす」

「いや、多分然らうだらうと思ふ——然らう、姉様は御病氣だと云ふから、兎に角お
通し申さう」と執次を見て「直ぐ此方へ御案内申せ」

「ハッ」と執次は、試合の掛聲に似た答へをして、急いで階段を下りて去つた。

(一)の二

「宜うこそ、さア何卒此方へ」

「菊野か、突如に何しに來た」

莞爾かな高藤の顔と、恠しむ兄の眼とに迎へられて、菊野子は卓子近く寄り立つ

た。電燈の光りを浴びる爲か、俯向加減な顔の色が、平素より蒼白いやうに見え、星
の眸は物怖する如に不安に働いて、其舉止も沈んで見える。身扮は高藤の眼に慣れた
紺の羽織にお召の縮入、さして美装と云ふてはないが、珠玉を包めば縮布も輝く道理
で、那邊か、愁ひを帯びた其姿が、言はん方なく美しいのである。

彼女は淑やかに一禮して、俯めらるる椅子に腰を下し、何やら恥入るもの、如く、紅
溢る、ハッ口を弄つて、さて其長い双の袂を膝の上に重ねて見る。

「何しに來たのか」と憲太郎は重ねて問ふた。

「兄上に相談があつて……」と尙俯目になつて居る。

「相談がある？」と憲太郎は鸚鵡返しに言つて、「相談して如何な事か……何か、除へ行
つてから此家に來たのか」

「は……いしえ」と妙に慌て、「隊へは行かなかつたけれども、此家へ伺つたら、大
抵の事が判明るだらうと思つたから……」

「何が判明るだらうと云ふのか」

「兄上が急に御出征になるか如何か、夫を先に聞き度いと思つて……」

「然うか、夫て来たのか」と憲太郎は胡散くさい眼をして、「其相談と云ふのは何か」「まア其様に急かなくなつて……段々と話しますわ。出發の日限は未だ定らないてせうね」

「いや、既う定つた。僕の中隊は明後日の夜、新橋から出發する事に決定された」

「えッ、明後日？」と思はず反上つて、「ぢやア愈々明後日ですか」

「然うよ、だから相談があるなら早くして呉れと言ふのだ。何だ菊野、如何な事が出来たのか」

「然う大した事ぢやないけれども……」

菊野子は吞むやうに語尾を消して、意味もなく膝頭を撫てる、と高藤は椅子を放れて、

「僕は階下に行つて居ますから、悠りお話しなさ」

「いゝえ、貴郎は何卒……」と菊野子は又慌てた。「何も秘密なんかないのでですから、

何卒此處に在して下さい。在して戴く方が、却つて都合が可いのですから……」

「然うですか、お差支がないから……」と高藤は又腰を下す、と憲太郎は又急しく問詰める。

「早く話して呉んか。僕ア九時迄に歸隊せにやならんから、道草喰はずに言つて呉れ、お前だつて汽車のなくならん中に歸らなまやなるや」

「終列車は既う出た頃です」と菊野子は抗らうやうに言つて、「私は既う歸らないてす……」

「既う歸らない？何故か、何故歸らんのか」

「歸られない事情がありますから」

「何だ其事情と言ふのは？菊野、何故黙つとる。まア言へ、何だ其事情と云ふのは？」憲太郎は急に急いで、肩を揺つて疊掛ける。

「色々混交つた事情があつて……私、川越へ行く位なら、事を死んで了つた方が可い……」

「死ぬ方が可い？解らんアお前は」と憲太郎は舌敷して、「事情も語らんで、死ぬの生きるのと言つた處で、一向判明らんぢやないか。さア言はんか、何を相談しやうと言ふのか」

噉附くやうに急立つる兄の語も、宛然耳に入らぬ如く、菊野子は暫く黙然とした、が頓て、其不安の眼を擧げて、眩し氣に顔を仰いだ。

「相談て外の事ぢやないけども、私、今夜から東京に居るやうにしたいと思つて、夫て出て來ましたの」

「東京に居たい……川越へは行かん」と憲太郎は咬きながら考へて、「菊野、お前姉様と衝突したな、馬鹿な奴だ……夫て歸らんと言ふのだらう」

「衝突したんぢやないけれども、意見が合はないんだから」

と高藤を偷見しながら言つた、高藤は聞くもなく聞かぬでもなく、香り高い埃及箕を煙らしつゝ、燈火亂る、牛込の景色を眺めて居る。

「意見が合はないも、衝突するも同じだ、夫て如何したと言ふのか」と憲太郎は笑つ

て居る。

「戯談ぢやありません」と菊野子は聲を震はして、「姉様は家を盛んで、河本さん許に同居するつて言ふのですわ。何程零落したからつて、姉妹連れて居候ぞれすものか……ですから私は夫なら姉様一人同居して下さい、私は東京へ出て自活するからつて然う言つて出て來ましたの。だけれども、如何して自活して可いのか、早速考へが附かないかも、夫て相談するのです。ねえ兄様、如何したら可いか考へて下さいな」

「僕に其様な考へか附くものか。僕ア戦地に行くばかりの身だ、加之、歸朝したばかりで、東京の事情には頗る疎い。設令は事情に通じて居るにしてからが、世間を知らぬ婦人が腕一本で生きて行くのは、容易に出来る事ぢやないんだ。何れにしても、出來ない相談だから、考へ直す方が可からう」

「ぢやア如何すりや可いと仰在るの？」

菊野子は紅の花に似る唇を震はして、穴の明く程憲太郎を視詰める。

「彼是言はずに歸るのさ。而して戦争の終るまで、姉様と二人で辛抱するんぢやない」

「其様な事は出来やしません。何故つて其辛抱が出来る位なら、姉様だつて、家を畳まうと言ふ筈がないぢやありませんか」

「いや、夫はお前の心得違ひだ」

「いゝを兄様こそ間違つて居ます。兄上は去年からの苦しい事情を知らなから」

「無論細かな事は知らんさ。けれども、大抵の事は知つて居る。年金ばかりで生きとつて……」

憲太郎は急に句を遮つて、此方に眼を向ける高藤を見た。

「高藤さん、飛んだ事をお耳に入れました。ハ、ハ何卒お開流しにして下さい」

「いや、然う仰在るに及ばん……」と高藤は其機に乗じて話を挟んだ、「其だ煮出がましい事を言ふやうですが、御令妹も堅く御決心なすつたやうだから、君の方で考へ直したら如何ですな」

「考へ直すと仰在ると？」

「東京に居られるやうにです」

菊野子は感謝の眼を擧げて、高藤の顔を打仰いだ。憲太郎は苦い笑ひを浮へて、

「併し、一概に妹の言ふ事ばかり信られんから……ま何卒御懸念下さらんやうに……」と言置いて更に菊野子を見て、「菊野、僕は如何しても賛成されんから、お前も熱く考へて見るが可いぞ、お前は姉様が家を畳むと云ふ事を以て、生活の出来ん證據だと言ふ心だらうが、夫も所詮、お前が姉様を補けないからだ、扶助料だけで生きるとるのは夫やア勿論辛からう、だが祖母様と三人森しの時も、矢張其て生活しとつたぢやないか。だから……」

「だけでも其時分は違ひます」と菊野子は早くも話を遮つて、「祖母様が存命の頃は、色々河本さんの御厄介になつたから、姉様で暮すよりか樂でした」

「夫なら尙更の事だ」

「何が尙更です」

「まア落着いて聞け」と憲太郎は急込む妹を抑へて、言葉静かに言ひ続ける。「で先づ僕の考へを言ふと、姉様の家を譲らうと言ふのは、夫やお前が補けて呉れんからだと思ふね。婦人一人て家を持通して行くと云ふは、鉦萬の富があつても出来ん事だ。姉様は、彼云ふ確乎した人だから必と其點を考へたに相違ない。お前は如何思ふか知らんが、姉様は全く武士的家庭の薰陶を受けた人で、意志の堅固な事は、夫や實に立派なものだ。僕なんか、大きな事はかり言つて居るが、其點に於ては逆も姉様に敵はんよ。だからお前も、黙つて姉様の言ふ通りになつて、僕の凱旋まで辛抱しとるが可いぞ。若し不幸にして戦死しても、其時は又好い相談相手が出やうと云ふものだから、武士の娘らしく悠々と構へて居れ。夫から河本の家同居する事だがね、夫も姉様の言ふ事に随つて居るが可からう、彼家には大層迷惑を掛けてゐるから、此上厄介になつちや濟まないが、お前達が行つとつたら、河本の母も何程か慰みになると云ふもんだ、夫にお前は容易く自活されるやうに思ふとるが、夫や空想と云ふもんで、世の中の事は、然う造作なく行くものぢやないから、まア僕の言ふ事を踏いて、戦争の

終るまで辛抱するさ。なア菊野、然うして呉れるだらう、僕頼みだ」

憲太郎は諄々と説き諭して、卓上の紙貫を摘み、さも忙し気に煙し始めたが、心の中では、自分は萬に一つも生還を期せられぬ身である。随つて自分が死んで仕舞つたならば、姉妹は遂に離散するは必定だ。あゝ我家も之で断絶の運命に陥るのかと、遠い事まで思ひ越して、言ふに言はれぬ淋しさを感ずる。

併し、諭さるゝ妹は、只訝しうに其横顔を眺めて居る。彼女は其語否を考へるよりも、粗放な兄の今の語が、奇怪に思はれてならぬのである。以前の兄は私の活氣を賞揚して、姉の沈鬱なのを悲しんで居たてはないか……生氣と果斷とは今後の婦人に最も必要なもので、従來の婦人の最缺點であつた……と云ふやうな議論を吐いて、お前は良此二つを備へて居るから、未頼母しいと言つて居た。夫が何に感動したのか、急に姉を賞揚げて、私を貶しつけるとは、何とも合點の行かぬ事である。

菊野子は此様な事を考へて、口惜しいやら悲しいやらで、涙含む程の心地になつた。

「兄様は些とも察して下さらないのね。夫ぢや私を片潰しにするのです」

「察しない事があるもんか、お前の将来……いや姉妹の幸福と云ふ事を思ふから言ふのだ。併し、お前は諾かれない事情でもあると云ふのか」

「有りますとも！」と勢ひ込んだが、其儘口を噤んで仕舞つた。諾さ容れられぬ事情と云ふは、即ち河本に對する結婚破談の一事であるが、言ひ後れた今の場合、新たに話す力がなないので、只氣を逸らせるのみである。

「あるなら言つて見るが可い」と憲太郎は前の語を受け繼いで、「何だね其事情と云ふのは？」

「既う可いのよ、言つた處で何せ眞に受けて呉れないから……」

「と執拗て誤魔化すかな、ハッハ、」

「何とても仰在い」と今度は眞に執拗た。すると今まで黙した高藤が、話の絶頂を機會に語を挟んで、

「渥美君、此問題は暫く僕に任して呉れませんか、菊野さんも、之から川越へ行かれ

もしまし、君も既う歸らなさやなりますまい。又、明日と云ふものがあるから、後で僕から話して置させよう」

「然うてすな」と憲太郎は時計を見て、「もう既う八時半だ、僕、隊の方に都合がありますから、之で失敬します」

言ひながら慌てゝ立つて、卓子に立懸けた軍刀を執ると、カチャ／＼と音を立て佩びるのだ。

「ぢや明日又来て呉れますね」

「左様……や明日は六つかしいかも知れませんが」と些時考へて、「然うてす、逆も伺へまいと思ひますから、恐縮ですが妹の事は、可いやうに御説教なすつて下さる、菊野、高藤さんの仰在る事を諾いてな、早く歸つて行くが可いな。若し僕を送ると云ふなら、又更めて出て来るさ」

憲太郎は斯う言つて答へを待たず、軍人らしい禮をして、早くも扉の外に立出る。高藤は後に跟いて見送りに立ちながら、目顔で菊野子と背を合つた。

二月下旬の或夜の十一時頃、渥美少尉は其所屬中隊と共に、勇ましく出征の途に就いた。

新橋停車場構内の軍用乗降場は、見送團隊の銘旗と、提灯の光りとに埋められて、目も彩なる光景を呈して居た。此日の最終なる件の輸送列車が出ると、一條の黒蛇を見るやうな群集が、忽ち無数の蟻と化して、朽木の穴を溢れ出る如く、一本口の出道からソロソロと、先を争うて四方に散り去ると、其中に銘旗を掲げ高張提灯押樹てた團體が、今、新たにされた感激を押し難ると云つたやうに、盛んに行進の曲を奏させて、萬歳々々と叫びながら、幾組となく練出す。路上の人も亦朝子や手帕を打振つて、負けじと聲を張揚げる。銀座通りは燭花の晃めき月なき夜の空を焚いて、百足の脚と列る各横町にも、軒提灯の光りが、萬點の星を列ねて居る。

小半時ばかりすると、さしも雑閘を極めた停車場界限も、暴風の後の野を見るやう

に間然と静まり返つた。今し方、横濱線の終列車が着いたので、客待の車夫も大抵散つて、人影絶えた一面の廣場に、弧線燈の光り寒く流れて、電線を掠むる空風のみが、凄し陰りを立て居る。

停車場内には、掃除番の驛夫等が符を動かし始めた時、人あるべくも思はれぬ待合室から、静かに立現はれた二つの人影があつた、乗後れて途法に昏れたか、夫とも話に耽つて歸るを忘れたのか、二人は怪しみ仰ぐ驛夫等には眼も呉れず、車寄の階段を下るのである。

右に立つたは、長い外套を纏うて、頭巾目深に冠つた男、左に添ふて頭を俛るゝのは、お高祖頭巾で面部を包み、吾妻コートの袖を袴と合せた、如何にも優柔の婦人である。

階段を下り盡すと、男はヒヨイと洋仗を擧げて、左手の交番際を磨ぐと、其物陰に踞つた車夫が、被つた膝懸を手早く脱ぎ、片手で頼棒握みさまに、ガラ／＼と覗いて来る。

「もう一輛なけりや不可ん」と男は口早に言った。

「へい」と車夫は忙がしく四邊を視廻して、「もう大抵歸りましたんで……一輛も御在
ません。へい」

「通りへ出たら無い事はあるまい、有るく、大丈夫ある。早く行つて呼んで来い」

「私なら何卒……」と女は四邊を憚る聲で、「私は歩いてても可御座んすから」

「歩けるもんですか、青山まで歩いて行く中には多分夜が明けて了ひますよ、ハッハ

「ぢや電車に乗ります」

「電車も了ひになつたてせう。愈よ車がなかつたなら、貴女僕のに乗つて行つしや
い、僕は近いから如何でも可い」

「夫ては却つて……」と女は又辭退したが、忽ち物悲し氣な語調になつて、「夫は然う
と、先刻からの事、如何したら可いでせうね」

「未だ心配して在つしやるか」

「心の中ぢや既に心配すまい、と然う思つてますけれど、兄も愈よ出發しましたし……
……私孤身になつたんですもの」

「孤身な事があるのですか、貴女には立派な姉妹がある。憲太郎君の言はれた通り、
松野子さんは實に立派な婦人です、ですから姉妹を力にして居さへすりや、心配する
事がないぢやありませんか」

女は何も言はず、涙含んだ眼を擧げて男を視た。外套の表は高藤で、高祖頭巾が
菊野子とは、更めて説明するまでもない。

處へ車を探しに行つた車夫が来た。言ふ處に依れば、車は大通にも見附らぬが、日
比谷へ行つたらあるだらうと云ふのである。

「ぢやア私、日比谷公園まで歩きますから、貴下は先に行つて下さい、色々
有難う御在ました」

「いや、僕も日比谷まで御同道しませう」と高藤は車夫を見て、「お前は先に行つて、
有樂門の前で待つて居れ。ぢやア菊野さん、歩きながら相談しませう」

(二)の二

車夫を先に遣つて、二人は二葉町通りに歩を移した。胸に血汐の燃える身は、寒さも何の感じとやらぬか、二人は輝く眼を屢々合せ、同じやうな事を繰返して人なき巷を行くのである。

菊野子の相談と云ふのは、先夜高藤邸で話し合つた、自分が出京の一儀なのである。彼女は兄の諭しに反さ難て、一先づ川越に歸つたのだが、何人が何と勧めやうと、河本家に同居する心は、如何にしても起らぬのである。義理の繩は如何に強くとも、高藤懸しさの一念に、胸に焰を燃やす彼女を、縛り留めやう力とならぬ。菊野子は姉の決心を冷笑して、一日不快の日を送ると、今日は止むを得ぬ所用があると云つて、早朝に出京したのであつた。爾も三人の同胞が生別死別を兼ねる者であるものを、彼女は憲太郎の出征を、一言も姉に告げなかつた。

「姉様に知らせなかつたですか」と高藤は良驚いた體で、「此大切な出發を知らせないと

は餘り甚し」

「ですけれども、姉様は未だ全快しませんが、若し見送りに来て、盛返すやうな事があつては……と然う思つたもんですから……」

「然うですか。併し、夫なら見送ると言はれた時に、お留なさりや可かつたせう。何も隠しとるに當らん事です」

「留めて留る位なら、私も心配しませんでした……夫よりか、姉様と同道に來りや、貴下に御相談を願はれないから……ね然うてせう。邪魔にはかりなつて、斯うしてお話する事が出来ませんわね」

「ハッハ、宛然子供のやうな事を言ふ」と高藤は笑つた。「夫ちや所謂頭隠して尻隠さずで、求めて失態を招ぐのです、併し過ぎ去つた事は爲方がないから、之から熱く御注意なさい。明日お歸りになつたら、隊の都合で不意に出發したとか何とか、可い工合にお話しなさるが可い」

彼は偽るなど教へる口で、虚構の皮着る手段を説くのだ。

「ぢやア如何でも歸れと仰在るのですか」と菊野子は吻と溜息吐く。

「然うです。僕も始終お目に掛り度いが、此儘にしとつて誤解されては、お互ひの爲にならんから、暫く川越で辛抱して下さり、其中には必ず好い機会が來ます」

「夫は然うですけれど……私、姉様と一緒に居たくないので……」

「だから先刻言つた通り、當分木田村の許に在なさいと云ふのです。姉様だつて夫なら異議がありませんまい、例の一件(結婚破談の事)から、貴女と河本さんの間柄が、非常に氣不味くなつたと云ふ事は、姉様が十分に知つて居られる……世間の人も亦、已むを得ない事と認めるに相違ないから、まア僕の言ふ通りになつて下さり」

「はア……夫て何時になつたら來られるのでせう」

「其中機會を見て、成る可く早く呼ぶ事にします。貴女の一身に就いては、決して不自由のないやうにするから、好きな繪でも描いて、暫く暢氣に遊んで居なさい」

「貴下も、毎週來て下さるてせうね」

「行きますとも！來るなど言はれても行かずに居られんです、ハッハ、妙な縁でし

たねえ」

「眞個、縁と云ふものでせう」

相見合つて莞爾した。不圖目を舉ぐれば、何時しか有樂門近くに來て居るのだ。電車の往來絶えた公園前の廣場は、電燈の光りのみ徒らに強く、更け渡る夜風颯々として、沙を捲いて吹き去るのである。

二人は其處で車に乗つた。菊野子は今夜を過す青山の富樫中尉宅へ、高藤は牛込見附の我邸へ、共に威勢よく轡を向けさせる。

(二)の三

松野子の病症は、激性のインフルエンザであつた。四五日以前に床を放れたけれど、發熱烈しかつた爲か、思ひの外に衰弱して、自由の働さが未だ出來ぬ。臥床中はお近が總ての世話をして、眞の親でも斯くまでとは思はるゝ程、情深い看護をして呉れた。松野子は其情ある世話を受けるに就けても、妹が頃日の行爲の餘りに冷やかな

のに腹が立つて、心の中で泣いたのである。

前夜の風が凪り収つて、今朝は麗らかな陽光が照つた。梅咲ける縁先から、ずつと眼を馳すれば、疎らな曲輪町の家々の間から、遙かに見える石原の田園に、匂やかな春の日光が流れて、小室の森は淺翠に、秩父の山は群青色に、何れも軟和な輪廓取つて、睡るが如くに浮んで居る。

間近な寺の時鐘が、今し方九時を報じた。松野子は例の四疊半に、今歸つたばかりの妹と對して、眼に驚愕の色を見せて居る。

「夫てね、如何かして知らせたいと思つたけども、餘り不慮なもんだから、如何する事も出来なかつたの」

菊野子は視詰めらるゝ眼を避けて、さも極り悪氣に斯う言つた。

「だけでも鳥渡電報打つて呉れりや、私も逢つて遭つたのに……」と松野子は段々に眼を落して、「私はよく〜縁がないのでせう。世時顔見たばかりに別れて了ふ……之限り逢へないかも知れないわね」

「私も電報を打たうかと思つたけど……姉様は未だ十分に逢らないから、無理に寒い處に出て、盛返しちや悪いと思つてね」

松野子は夫には答へず、

「私は如何して斯う運がないだらう」と呟いた。

「必ず戦死すると云ふんぢやなし、其様に氣落し爲なくても可いわ」と之も呟くやうに慰めたが、「夫はまあ夫として、同居の事は如何なすつて？矢張然うしなぢやならな」

「あゝ私は然う決心したの。夫て私女が歸つたら相談して、一日も早く河本家へ行か度いと思つてね、心始末をして居たのよ」

「何程相談されても、私は行かれないんだから……、如何でも同居するつて言ふなら、姉上一人で行つて下さら」

「如何しても行つて呉れませんか」

「えゝ、私死んでも行きません」

「ぢやア如何して暮す意です」と少しく激した風で、「菊野さんは、些ともお金の事を考へて呉れないのね。和女は年金丈けを頼りにして、暮して行けるものと思ひますか、斯うして一家を構へて居りや、何程辛抱しても十五圓や二十圓のお金ぢや、逆も暮せるものでありませんよ。河本さんの家へ行けば、第一家賃と云ふものがなくなるし、二人で自炊して居れば、少しづつ貯蓄もされるしするから、可厭だらうけど何卒然して下さい。ね菊野さん、暮所の事は私一人でも可いから、貴女は勉強なり何なりして、時節を待つ事にして呉れませんか」

と宛ら縋らんばかりに言ふ顔に、菊野子は冷やかな一瞥呉れて、

「生活向きの事は如何でも可いけれど、私如何しても行かないから、何卒放抛といて下さい」

「菊野さん、夫ぢや餘り勝手過ぎると云ふものでせう、憲さんの事も知らして呉れなさい、河本さんの方にも義理を缺いて……」

「姉様……」と語半ばに叫んで、「何程仰つても駄目ですよ、私既に決心して丁つた

から……」

松野子は眼を潤ませて、何やら言出さうとした時に、傍の縁側に人影落ちて、續いて荒い足踏の音がする、姉妹は一齊に眼を回した。

(二)の四

跳り上るやうに縁側に入つたのは、筒袖の綿入に、織紐だらけの股引穿き、提袋人と煙管とを、左右に分け持つた六造である。怪しみ視上ぐる姉妹の前、縁側の中程に胡坐を掻いて、凝と菊野子を睨み据ゑた。

「爺やさん、如何したの？」と松野子は身を向け直した。菊野子は反對の窓の方へ、恐怖を帯びる眼を外らした。

「いや、如何もしねえ。だが嬢様、まア黙つて居まつしやいよ」

六造は斯う抑えて、扱て闊際まで擦り寄ると、穴の明く程菊野子の横顔を見て、
「これ小嬢様……菊野様、些と此方へ向きなさる、俺ア言つて聞かせる事あるだ」

「オホ、オホ、何を言つて居るの、妙な人ね」

菊野子は事もなげに冷笑した。

「可笑しいかね。成程可笑しかつべえ。だがの菊野様、一寸の蟲にも五分の魂つて事があらア。自分ばかり偉がつてもな、俺アお前様なんぞ何とも思はねえ。毛唐人の眼言見たいな書讀んでも、繪イ描いても偉えてねえぞ。一字一算出来ねえでも、義理を守つて、人情を立て、行く人が偉えつてもんだ」

松野子は備々して、

「爺やさん、彼方へ行つてお呉れな。言ふ事があるなら後で聞くから、まア彼方の用事をして下さい。ね、今相談があつて居るのだから……」

「や濟ましねえ。邪魔して濟ましねえが、言ふ丈は言はねえと、腹の蟲が承知しねえから、些時待つてお呉んなせえ」

六造は二三度頭を下げ、更に又菊野子を睨み据ゑて、

「ソッ菊野様、此方に向きなさる。俺ア今日のは、移轉の仕度して置くべえと思つて、

手傳ひに來たどが、性根の腐つた話聞いて、逆も我慢が出来なくなつて、お前様に教へへいと思つて來た。考へてる事、何も彼も暴け出すがの、お前様人情と云ふ事を知んなさるめえ。加減の悪イ姉様を放下して、數度東京へ何しに行つたり。いや夫ア言はれめえ、眞可彼の高藤の尻イ追驅け廻して、勝手な眞似して歩いた、ア言へますめえ」

「な何ですと？」と菊野子は眉を上げた。

「怒つても無効だよ。何程隠しても威な知つてるぞ。うんにや未だくある。言度い事澤山あるが、兄様が戦争に行くつてえのに、自家へ知らせねえて何て事だ、設合んば姉様が行かれねえにしてもだ、電報打つて知らせるのは、姉妹の義務てねえか」

「何卒廢してお呉れ、爺やさん、お前の知つた事ぢやないんだから」

松野子は持餘したと云ふ跡である。

「尙少し言はせてお呉んなせえ、後で悠り謝罪ますだ」と聞容るゝ風もなく、「加之、又其身扮は何だ、可厭に奇麗な着物に纏つて、大層飾り立て、居なさるが、些と姉様

の身扮を見るが可いぞ、姉様は明けても暮れても同じ着物だ。是に褌掛けて、臺所で働いて居なさるのに、お前様ばかり勝手な事して、夫て濟むものと思はつしやるか、菊野様、夫ぢやお前様、罰が中りますぞ罰が」

六造は歯噛みをしながら、煙管で一つ縁側を叩くと、其血走つた眼からホロリと涙を落した。菊野子も唇を噛締めて、同じく涙を浮べるのだ、彼のは人と思ふ誠心の、湧いて溢るゝ泉であるが、此は只、我のみ高い名と見得とを凌辱さるゝ口惜しもの、怒りを推る露である。

「頼まう」と突然玄關に訪ふ聲、一同ハツとして耳を澄すと、又高らかに呼び立つる。

「客が来た、誰だね」

六造は呟きながら立上る、客は答へのないのに熱れ込んで、胸積りどきに呼びよつてある。

(二)の五

「これに郡長様……お入来なせえ」
 「菊野子様が在かな」と木田村郡長は帽子を冠つた儘返つて、「乃公が来たと言つて呉れ」

「菊野様に用事がある？ 菊野様は生憎お不在で御座りますよ」

「お不在？ 未だお歸りにならないのぢやな」

「左様で……未だ東京からお歸りなさらねえて。はら」

「然うか、夫てはお歸りになつたら、些時乃公許まで来て下さるやう、忘れずに言つて呉れ」

「俺ア當家の者てねえから、お請合申す譯には行かねえ」

「可笑な男だ」と郡長は呟いたが、諍ふのも大人氣ないと悟つたか、黙つて踵を回すのだ。

大跨に運ぶ其片足が、恰度園を跨いだ時、奥の方から忙しい足音が迫つて、

「木田村さん、些時お待ち下さり」

と震へながらも清しい聲。那長は立直つて振向いた、見れば外出姿の菊野子が、小さな包物を持つて立つて居る。

「さう菊野子さん」と那長は微笑んで、「些時お話ししたい事があつての、通り掛りに寄りましたがな、此男が不在だと云ふんで、歸り掛けの處ぢやつた」

「此人の言ふ事なんか……」と言ひながら菊野子は下駄を穿いた、「私も宅へ伺ふ處でした、ではお供致しませう」

「夫は好都合……ぢや徐々行きませすかな」

棒の如く突立つ六造を尻目に掛け、二人は其處を出やうとした時、又後から呼止むる。

「菊野さん、些時待つて下さり」

野分に吹かれた秋草の花、萎れ傾く哀れの風情で、悄然と現れたは松野子である。

「何か御用？」と菊野子は振向いた、那長は鳥渡目禮して、姉妹の顔を等分に視る。

「夫ぢや如何でも行くのですね？」と潤んだ眼を据ゑて、「移轉す中丈けも居て呉れませんか」

「何度言つても同じです」と妹は投げるやうな語調で、「私は決心して了つたんだから、當にしないで居下さり」

「然うですか。ぢやア和女は、既う姉妹だとも思はないのですね」

「思はない事かあるものですか……然う心配しなかつて可いてせう、只、鳥渡意見が異つた丈けだから……」

松野子は唇を噛んで脚許を視た。あゝ其寂寥の威を誰が知らう？ 喰へば野に咲く桔梗の花の、頼む草木は刈去られ、並ぶ一本また引抜かれて、今は、我のみ風に揉まれて立つ心地、言はうやうなき薄命も、語る肉身の友とともない。松野子は雄々しき決心はしながらも、涙の浮ぶを禁じ得なかつた。

「當にして呉れと頼んでも、誰當にする者あるべえ」と六造は休へ難て言つた、「誰様、

既う何も言ふてねえ。此様な人當にしちや、却つてお前様の爲にならねえて。御覽なせえ、郡長様が迎えに来る、之れ幸ひと出て行く、威な前から仕組んだ事だ。土地一番のお役人が、人数へる事しねえて、姉妹間に波風立たせる……いやはや立派な政道だ、偉え役人は異つたもんだ」

「こら、何だ其物言は？」と郡長は儼乎となつた。と菊野子は鍾馗の如き其顔を仰いで、

「さア参りませう、此様な人の言ふ事なんか、如何でも可いぢや御在ませんか」

「左様……ハッハ、ぢや行かうか」

「姉様夫ぢや行きますよ。毎日でも會へるけれど、お身を大切にしてくね……」

二人は前後して玄關を出た。松野子は物言度氣に唇を動かしたが、流るゝ涙に目が曇つて、聲が咽喉に詰つて仕舞つた。

「可哀想になア」と六造も密と臉を拭つた。

(三)の 一

春は四月の上旬となつた。川越界隈は今が櫻の真盛り、就中、舊城地内なる天神社邊は、空一面に紅の霞で蔽はれたが、人は戦争に心を奪られて、風流の扶輪へすものともなく、花は賞でもされぬ間に吹雪となつて、腕くも散つて行くのであらう。

如月下旬、鬼神を泣かしむべき旅順閉塞の飛報が、暴風の如く全國に傳はつた。人は驚心駭目して、跳り上つて叫ぶ中に、翌月の廿七日、之が再舉に咸波の度を新たにされ、軍神中佐が壯烈なる戦死を聞いて、只譯もなく涙を流した。嗚呼旅順！此短き一名詞が如何に國民の血を沸かしたか。恤兵義會や獎兵會が、全國至る處に設けられ、間接射撃、強行偵察など言ふ語が、童叢婦女子の口にも上つて、人は目を側め耳を敬て、日毎に戦報の來るを待つて居る。

石原村の河本家も、此様にして月日を送つて居た。梅花散る頃には軍旅の進行を思

ひ、桃の花咲く背戸に立つては、章治の身の上、恙なかれかしと心に念じ、櫻盛りの昨今は、やがて陸戦あるべしとの噂を聞いて、坐るに胸を跳らして居る。

松野子が此家に同居してから、既早二月餘りとなつた。身が動けば心も紛れる道理——一緒に働いて慰やうと申合つて、二人は一心不乱に働いた。お近は毎日のやうに田畑の指圖、時には自ら鋤を執つて、畑を造る事もあつた。松野子は嗜みの針仕事は勿論、機織る業を教はつて、梭を動かす日もあつた。夜は燈火を拵んで、新聞で見た戦争の談、章治が通信の戦地の話、陣中生活は彼様も有らうか、行軍の苦しさは斯うもあらうかと、想像に餘る想像談をして、待つものは無事の音信を見るの嬉しさのみと、翌日の郵便配達を、千秋の思ひで待つのである。

夕餉を終へて程ない頃、久しく音信のなかつた菊野子から、珍らしく使人が来た。齎した書状を披いて見れば、至急お目に掛つて話し度い事ある故、此者同道にて寓所まで来て呉れとの文言であつた。

さりとて訝しい書状である。別れ〜になつてから三月越し、此方は數ば訪ねて

も、一度も來訪しなかつた者が、至急の相談とは何てあらう。松野子は解し難てお近に謀つたが、お近とても判断の附かう道理がない、多分、戦地の憲太郎から音信でもあつたらうか、兎に角行つて見るが可からうと決して、松野子は使人と共に立出でる。門を出れば麥二三寸、青々とした畑の上に、早や夕霧が這ひ蔽つて、遠近の森は煙のやうに霞んで居た。赤間の水は音もなく流れて、眠氣に廻る水車の音、何方の誰の手さびか、遠くの方で細い笛の音がして、廣野の果なる鏡波の肩に、夕星さやかに瞬き始めた、人の心の春の快樂は、戦争の聲で掻消されたが、自然の春は永へに平和である。

取留めもなき思ひに耽つて、無言で歩を移した松野子は、曲輪町の境に入つた時、使人を振向いて、

「貴下、妹の用事と云ふのを御存知ぢやありませんか」と聞くと、

「知りません」と使人の書生は木で汗拭する返答である。

て又口を噤んで足を早めた、磯高な坂を上つて、竹垣傳ひに裏玄関に着くと、使人

の書生は兎のやうに式寮を上りて、
「些時茲ても待ち下され」と奥へ飛んで行く。

(三)の二

松野子は得知らぬ胸騒ぎを感じながら、暫く玄關前に待つて居ると、鴉鳥娘の多代子嬢が、平素のやうに嬌姿を作つて、

「何卒お通り下され」と立迎へる。

「はゞ……」とばかり、松野子は言寡々に奥へ通つた。屋内は黄昏の色を籠めて、既早人顔も定かに見えぬ。幾度も入つた室であるが、今日は何故か心が更つて、知らぬ家にも入るやうだ。

頓て見慣れた唐草模様の襖が啓くと、強烈な洋燈の火光がパツと眼を射る、松野子に眩くやうな感がして、我にもあらず立感んだ。室内からは清しい聲で、

「姉様、此方へ被來いな」と呼入れる。

松野子は黙つて室内に入り、俯められた蒲團に坐つて、先づ珍らしさうに四邊を視た。其處は例の名書室で、然なくも美々しい室の中が、眩ゆさばかりに飾られてある。床の間の傍には、五尺もあらずと思ふ委見鏡が立つて、燈火の反射する對ふの壁には、新しい繪額が澤山に掲げられてある。其は菊野子が筆のすさびと知られるが、紫檀の書棚や茶器や、文房具を入れた西洋棚や、其外様々の小道具類の、美しく飾立てられたのは、合點が行かぬ有様と思つた。

「姉様、大層御無沙汰してね」と菊野子は情の薄い挨拶して、「忙しい處を、よく来て下さいましたね」

「御無沙汰はち互ひ様よ」と姉は笑顔を作つて、「私に相談つて如何な事？」

「オア悠りして頂戴。段々と話すんだから……姉上御飯は未だてせう」

「既う済んだのよ」と更に四邊を視廻して、「大層立派になつてね。立派と言へば和女も立派になつたわ。姉妹で暮してた時から見りや、全然別の人になつたやうね」
松野子はさも珍らしさうに妹を視た。妹の姿は如何さま其い様りやうである。召

縮緬らしい瀟灑の袷に、琉球紬井の字紵の羽織を重ね。ふつくり結つた束髪に、薔薇の一輪挿した粧ひは、輝くばかりの美しさで、三月以前の菊野子を見た眼には、宛然別人に接するやう、生氣も艶容も舉止も、數段勝つて居るのである。

「相談と云ふのは、其事に就いてなの」と莞爾したが、「後で悠り話させう。姉上紅茶を召飲つて？ 夫ともチヨコレートの方が可いの？」

「何も欲しくないから、もう何卒……」

「まア一杯召飲れ」と立掛けると松野子は忙しく呼止めて、

「菊野さん、まア話を聞きませう。私早く歸らなさいやらならぬから」

「其様に急がなくても可いでせう」と菊野子は腰を落して、「別に御用もなうでせう」

「いゝえ爲掛けた仕事があるから、直ぐ歸らなさいやらならぬのよ」

「大層性急になつてね」と微笑んだが鳥渡小首を傾げて、「ちや話しますがね、私結婚しやうと思つて、夫で姉上に相談するのよ」

「結婚を……」と咬いた松野子は、其鮮やかなる眉を曇らした。「而して何處へ嫁ぐの

です」

「高藤さんの……」

と流石に羞含んで少しく顔を赤らめたが、其活々した眼の色は星の如くに輝いた。

「えッ高藤さんと……」松野子は反返るやうにして叫んだ。

(三) の 三

喫驚の眼を睜く姉を視て、菊野子は次第に慢るやうな色を浮べ、語調も最と重々しく、爾も得意氣な態度になつて、

「高藤さんと結婚するなら、姉上も異議がないでせう。相談つて其事よ」

「夫ちや既に定めて了つたのですね」と松野子は聲が震へた。

「え、既に定めて了つたの」と之は又澄したものである。

「定めたつて、誰に相談して定めたのです」と今度は儼乎となる。

「誰にも相談しないけども、姉上にさへ異議がなかりや、誰の同意を得なくても可

のよ」

「ぢや私が同意しなかつたら如何します」

「ぢや同意されないと仰在るの」

「いゝを、する爲ないは別にしては。然う云ふ話は、一應知らして呉れる譯のものぢやありませんか。人間一生の大事ですもの、然う勝手にされるものぢやないてせう」

「私には私の自由があるわ」

自由は私に

「自由ではありません、勝手に、和女の我儘と云ふものです。何故かと言や、菊野さんは些とも人情を考へないからですわ。熟く考へて御覽なさい、和女は河本さんに對して、如何な行爲をしたと思ひます。彼云ふ正直な人の心を、和女の勝手に弄んで、お終には大層な失望を與へたのでせう。其時も私に相談して呉れないし、今度も亦、一人で定めて了ふなんて、餘り酷いぢやありませんか」

「夫や私が悪かつたけども、私が河本さんを愛して居なかつた事……いゝえ兄様の爲

に婚約したつて事は、姉上も知つてるぢやありませんか」

「夫が和女の卑怯な處でせう。え、卑怯と云ふものです。お金の爲に一時承諾して、金が出来ないから廢めて了ふなんて夫ぢや宛然醜業婦も同じですわ。金の爲なら何故最初に言はなかつたのです。私は和女のする事を見る毎に、身を斬られるやうな思ひがしますわ」

「醜業婦見たいだなんて、随分甚い事を言ふのね」と口惜しうに身を揺つて「姉上は私を辱しめるのですね。醜業婦のやうだつて……同胞の爲を思つてしたのは、餘り甚いわ。彼の時は眞個方便でしたんだもの、金が出来て式をしても……いゝえ、式をしない前に譯を言つて、破談にする意で居たのですわ」

「菊野さん、如何して其様な心になつて呉れました。然ういふ不正な心を有つては、祖母様や亡父母に濟みませぬまい。設令は彼の時金が出来て、夫で憲さんが職功をするやうになつたにしても、夫が憲さんの名譽になると思ひますか。和女は辱しめるかなんて言ふけども、誰が自分の妹を笑はれて、心地の可いものがありませう……和女が

河本さんに爲た事は、宛然詐欺と云ふものですよ」

言過ぎはせぬかとは思つたが、最初の一語唇を出ると、咽喉と溢るゝ無限の怨言が、自つと迸るのであつた。併し其怨言は、眞實妹を思ふ心の響きなのである。見よ、言終つて凝と視詰めた松野子は、眼を潤ませて居るではないか。

「過ぎ去つた事は如何でも可いのよ」と妹は口の中で言つて、「今度の事は、私の地位が定まるのですから、悦んで下さつても可いわ……」

「いゝえ、悦びません」と松野子は頭を掉つて、「私は悦ぶ程の事はないと思ひます」「何故です」と菊野子は良鋭く問ふた。

良人を選んだ高藤は俊才と言はるゝ高等官である。家には數萬の財産があつて、風采も學力も群を抽いて居る。然る勝れた男を良人に有つと聞かば、誰しも羨やみ且つ祝すべきものを、肉親の姉が悦ばぬとは何たる事か？ 菊野子は斯う考へて、

「姉様、何故悦ばしくないのです」と重ねて問ふ。

「和女の所爲が正しくないからです」と松野子は猶豫もなく答へた。「和女は平素愛情

愛情つて言ふけれど、何程愛情が大切でも、自分丈け満足すりや、人は如何でも可いとは言はれませぬ。菊野さん、和女は男一人の心を殺して居るのですよ。ですから和女の口調で言や、此方の満足が彼方の苦痛となるのです。夫やア愛情と云ふものも、貴いに違ひないでせうけれど、外に義理人情と云ふものもありませんよ」

「義理ですか」と冷然として、「夫や義理も貴いに違ひないけど、義理立ての爲様と云ふものは、其時々に変るものですからね」

「變るつて如何？」と姉は呑込めぬ顔。

「まア廢しませう。姉上と私とは、全然思想が異ふんだから……其様な話は何何でも可いとして、右に左、私が幸福になつたら、姉上も幸福になるぢやありませんか。何方か一人出世すりや、お互ひに補け合はれるから……」

「私補けて貰はうと思ひません」

「ぢやア全く離れッ了はうと云ふのですね」

「離れると云ふのぢやないけれど、和女が結婚して丁や、自然に離れて丁よのよ」

「然う云ふものでせうかねえ」

言つて菊野子は冷かな笑を浮べた。彼女は今しも秘密を聞く鍵を得たやうに、鋭い一種の想像が、頭胸の底に閃めいたのである。其想像とは？ 姉は逆境に立つ僻みから烈しい猜忌を起したのだ。我が華やかな結婚談が、姉の胸底に潜んだ功名心を、急に煽り立てたに相違ない……と菊野子は斯う考へた。
冷笑はしたものの、然う思つて見れば流石に氣の毒な感じも起る………可惜花咲く年紀を、草深い田舎に埋らせて、末に如何なる事だらう、と考へれば、言はれぬ悲しさが起つて来る。で漸次に面色を和らげて、

「姉様、高藤さんも然う言つて居ますがね、姉上も其中、何處へかお世話しなすやならなすつてね、お逢ひ申す毎に言つて居ますよ」

「世話するつて……私の事ですか」

「え、高等官にても結婚するやうにつて、親切に仰在つて在つしやるの」

「私なら、世話して戴かない方が可いのよ」

松野子は淋しく笑つたが、宛ら盤石に壓さるゝやうな、烈しい寂寥を感じたのである。併し、何故の淋しさかと問はれても、恐らく言現はせまいと思はるゝ。

「夫よりか、先刻の事を聞かうぢやありませんか」と姉は滅入る心を引立て、「私に相談して如何な事か、早く其事を聞かして下さい」

「結婚届の事です」と之も妙に更つて、「何時式を挙げると云ふ事もないけれど、何れ然うなつた時は、姉上の名を出して貰はなすやならないから……」

「私に連署しろと言ふのですね」

問反して顔を視た時、ズシリと袂が啓いて、大兵肥満な郡長の姿が現はれた。

「松野子さん、よくお入來なすつた」

と郡長は艶のない物の言様、難澁しい面色して姉様の前に悠然と坐つた。松野子は蒲團を這つて、丁寧に會釋する。

「さアも敷き遊ばせ」

と菊野子は蒲團を俯める、と郡長は黙つて膝の下に取つて、意味あり氣な眼を松野子に向け、突如にアハッハ、と笑ひ出した。

「よくお入來下すつた」と重ねて言つて「乃公も些と多話したい事があつて、お待ち申して居ましたて……」

「左様で御座いましたか、如何云ふ御用で御座いませう」と松野子は聲も容姿も正しうする。併し、心の中では、既早會得して居るのである。

「左様……夫は其……」と郡長は菊野子に胸せして、又、故とらしく笑つた上、「最う御承知ぢやらうと思ふが、實は御令妹の結婚一件ですてな。お聞きなすつたてせうな」

「はい、今し方聞きました」

「御承知とあれば、乃公から申上げるに及ばんが、之や無上の良縁ぢやから悦んで下さい。縁故ある乃公が言ふと、樂屋賞めになるやうで可笑しいが、高藤は前途多量の

青年で、將來樞要の地位を占めるに相違ないのぢやから、菊野さんの良人として、然らば不足な事はあるまいと思ふて……ま兎に角悦んで下さい」

得意氣に言つて煙草に火を點けると、反返つてフウと煙を吹く。松野子は只胸が騒ぐばかり、順に答へも出て來ぬので、其不快な面色を見せまいと、少し身を捻つて俯首れる。

「何程仰在つても無効ですから……」と菊野子は後句を消して、苦笑しながら郡長を見るとき、

「な何がですな」と郡長は、小兒の蹠へさうな澁面造る。

「姉様は悦ぶに足らないと言ひますから……」

「悦ぶに足らん？ ほう、妙ですな夫は、何故悦ぶに足りませんな」

「如何云ふもので御座いますか、私にも解り難ますが、姉様は兎に角、反對して在つしやるのです……」

「反對、如何も解らん、乃公には其意が解せん。夫や貴女のお聞違ひぢやらう」

「さへ、間違ひぢや御座りません」

「さや間違ひに相違ない」と郡長は押蔽せるやうに叫んで「何故と問ひなされるまでもない。世の中に妹の出生を悦ばん姉がおりますか。夫も教育のない者でもありや鬼も角、御聰明は姉様が、其様な事を仰在る道理はない。儘に貴女の御間違ひぢや」「さへ、菊野さんの間違ひぢや御座りません」と松野子は蒼白い顔を擦けて「私に儲に然う申しました」

「悦ぶに足らんと」

「左様で御座います」と良聲が整ふて来る。

「とすると如何云ふ譯です、妹様の一身が、地位も名譽も高まるよ云ふのに、悦ぶに足らんとは合點し悪いお語で……」

「一概に然うお考へになれば、如何にも御合點が参りますまい、ですけれど私は此縁談が、餘り正しい事でないと思ひますから……」

「は、ア、正しくない。すると那邊が正しくないですな、何か不正な事でもあることお

考へてすかな」

「格別不正な事もありますまいけど、私は然う考へて居るので御座ます」

「ハッハ、甚だ不得要領ぢや」と郡長は嘲けるやうに笑つた「漠然とお考へなされる丈けぢや、お氣の毒ぢやが理由とならん。正しくないと言ふのは、取りも直さず不正になる、とすると假にも不正と云ふ以上、多少の理由がなけりや、人を誹謗する事になりやせんてすかな。松野さん、御遠慮なさるに及ばんから、お考へ丈け言つて御覽なさい。貴女は如何云ふ點が正しくないと思はれるかな」

松野子は眼を輝かして、少しく膝を進めたが、開き掛けた唇を、其儘、血交染む程に食締つた。

(三)の五

松野子が心の中には、二つの大きな情念が、烈しく闘ひ始めたのである。明白に反對の理由を言はねば、妹を誹謗する事になると云ふ郡長の語が、辨るが如く心窩を刺

して、自づと肩が吊るのであつた、併し残念ながら我が正しい言條さへ、打明け難い境遇である。章治の心を弄んで、散々不徳を働いた上、誰に一言の相談もせず、勝手に定めた妹の婚約は、聞かば誰しも爪弾きするであらう、けれども言へば妹の耻辱になる——いや第一に章治の名を辱しめる事になる、と言つて辯明せねば、出世を嫌む卑しい心とも見られやう。あゝ如何したら可いてあらう……。

と松野子は哀れにも胸を悩ました。氣味悪く光る四つの眼珠に、左右の頬を睨れつゝ、暫く心を押鎮めたが、此場で言籠めらるゝ口惜しさを堪へれば、恩怨ある人を辱しめずに済む事だ、然うだ。何事も我一人の辛抱で済むのである、と突嗟の間に思案を定めて物静に口を開た。

「不得要領だと仰在りましたが、全く其通りで御座います。際立つて申上げる程の理由が御座いませんから……」

「理由がない。ハッハ、夫や亂暴ぢや。夫ぢや貴女、嫉み根性と言はれますぞ。世の中には、譯もなく人の幸福や成功を猜むものがありますからな」

「何と仰在られても致方が御座いません、御攻撃は覺悟して居るのですから」

「いや攻撃はせん、が何程反對すると言はれても、結婚を差止める事は出来ませんぞ。届出をする時には、必ず運署しなさやならんてすよ」

「夫でも私は拒みます」と聲震はして、「斯う申したら、嘘も憎しみなさるてせう。けれど私良心に濟まない事が御座ますから、名を出す事は断り致します」

「夫ぢや些と我儘が過ぎませんかな。貴女のやうな無理を通されちや、世の中が關になる」

「姉様、何を怒つてらつしやるの？」と菊野子は語を挟んだ、「え姉様、何を其様に怒るのです。姉上が何程拒んでも、兄様が承諾したら、拒む事が出来なくなるぢやありませんか」

「憲さんは憲さん、私は私です。私は自分の良心が救へる通りにしますから、拒み通しても通せなくても、此結婚に同意する事が出来ません」

「ぢや妨害すると云ふのですか」

「何て妨害などするものですか、菊野さん、私は未だ、夫程淺猿しい心にはなりませんよ」

「菊野さんち廢しなさい」と部長は激して叫んだ。「物の道理の解らん人に、何程言つても効能がない、所謂口に風引かせるに過ぎんから、まア放擲て置きなさい」

菊野子は黙つて點頭いた。部長は指を撫てつゝ語を續けて、

「松野子さん貴女の口調を藉りて言ひますがな、乃公も良心の救へる通りにするから、其思召て在つしやい。ハッハ、畢竟臆縮べだて」と大人氣ない事を言ふ。

「承知致しました、如何とも御隨意になすつて下さい。では私之で御暇を致します」

「然うですか」と部長は冷笑した。菊野子は何とも言はず顔を外向けた。

やがて松野子は暇を告げて屋外に出た。嗚呼堪へられぬ思ひに堪ゆるのも、正しう心を保ち度いからである。又恩誼ある章治の名を汚したくないからである。

彼女は黄昏の春の巷、紀念の多い曲輪町を辿つて、淋し氣に歸途に就くのであつた。

(四)の一

妹の婚約を知つてから、松野子は久しく彼女を訪はなかつた。勝手氣儘な妹の所爲、人を蔑如にした部長の舉動等に、太く辱められた心地して、思ひ浮ぶるさへ不快であつた。随つて、此一事には耳を塞いで暮して居たが、彼等の間には結納の取交しも済んだであらう。

花に恨み多き戦國の春は去つて、新緑の蔭清しき初夏が來た。出征軍人のある家々は、恐怖と苦痛とを押へて、静かに時を過して居る。鴨綠江方面は云ふまでもなく、遼東、北韓の各所に於ける彼我の小鬪争が數ば耳を打つて、驚破、大戦の機熟しぬ……と思ふ間もなく、五月一日九連城の占領を始めとして、同月六日に於ける第二軍の普蘭店占領、翌七日には鳳凰城乗取と、慘烈にして且壯快なる戰報が續々と傳へられて來る。

お近と松野子は一心に働いた。實に戰場の人の苦しみと思ひ遣れば、一刻も懶けて

居られない。二女は軍人の若痛に負けまいと、宛然母子一體になれるやうに働いた。我身を捕つて人の痛さを知るとやら、章治を思ふお近は、憐れな軍人の子と引取つて、父の凱旋まで養ふ事とした。夫は同じ石原村のもので、留守には水車の番をする彼の老人と、十三になる孫の亦吉とである。お近は其少年を召使の名義で雇つて、些少なから給金も與へる事にした。斯くして山中は田畑の指圖をして、夜は内職の機を織る。松野子は針仕事を第一として、炊事の世話もすれば、矢張内職機も織る。忠僕六造は身を粉に碎いて、耕作に従ふのであつた。

けれども日増に心配が加はつて、一同、戦地の空騒む日が多くなる、郵便の来る時間になると、お近は何事も差指いても門に出る。而して章治の音信を手にする時、家にも入らず披見して、無事の一語を吐きつゝ、小さな銀貨を密と配達夫に握らせる。夫から一同を呼集めて、松野子に讀聞かせるが例である。

五月二十八日の午下りであつた。家族は淡泊した食事を済して、各々、仕事に着手とした時である。表の門から筒袖の單衣を着て、莖草履穿いた少年が、毬のやうに飛

んで来た。三尺餘りも草履を刎飛して、兎の如くに縁側に上ると、

「小母様、町で大騒ぎしてるよ」と息を切らして言ふ。

「大騒ぎ？」とお近は眼を据ゑて、「何て其様に騒いでるのから」

「號外が来たつて。ほら鐘が鳴つてらア、耶穌の教會で鐘撞いてらア」

如何さま耳を澄せば、赤間川右岸の青葉越しに、遠く急しい鐘の音がする、又勝報が傳はつたので、川越町の天主教會堂で、祝福の祈りをするのである。

「また勝つたんですよ」と松野子も眼を輝かして、「陸軍でせうか海軍でせうか、亦さんお前聞かなかつたの？」

「陸軍だつて言つてたよ」

「陸軍なら近衛ぢやないでせうか」とお近は松野子を視て、「ねえ松野さん、近々大きな戦争があるだらうつて、先日の手紙にあつたてせう」

「然うてしたねえ。明日になつたら判明るてせうけれど……」

其明日が待たれるものか、と云ふやうに、お近は亦吉の方に向いて、

「亦吉や、お前直ぐ武州屋さんへ行つてね、其號外を借りて来てお呉れ」

「うむ行つて来るよ」と亦吉は身輕に縁側を下り、裏返しになつた草履を直す、「嬢さん鳥渡来てお呉れ」と意味あり氣な顔で松野子を見る。

「私？」と松野子は訝しみつゝ縁端に出て、「何か用事があるの？」

「ひ」と點頭いて聲を密め、「お前さんに逢ひ度いつて人が居るよ」

「私に逢度い？」と眉打撃めて、「誰なの其人は？」

「名前を知らしちや不可いつて言つてるよ」と亦吉は室内のお近を偷み見て、「些時逢へば可いから、屋外に出て呉れつて頼むんだ」

「誰だらう。まア可厭だわね」と咬いたが、お近の方を振り向いて、「ねえ小母様、私に逢ひ度いつて人があるんですつて……如何したら可いつてせう」

「行つて御覽なさいな」とお近は怪しむ色もなす。

「だけでも姓名も言はないんですから……」

「まア行つて御覽なさい、怖い事もないでせう」

「行つて見ませうか……ちや些時出て見ませう」

松野子はお近に會釋して、勝手口に廻つた。今、埋木の淋しい境遇、左程親しい友もないのに、密かに呼出すとは心得ぬと、松野子は恐怖を含んだ好奇心に驅られて、密と勝手口を出て見ると、亦吉は早くも其處に立廻つて居る。

「亦さん何處に居るの？」と松野子は問ふた。

「嬢さん、小母様に饒舌るから可厭だ」と不平顔して、「小母様に内密だから、密ら然ふ言つたんだよ、嬢さん昔言ふから不可いや」

「だけでも都合が悪いぢやないか……え、矢張私が悪いわね、亦さん勘忍して川敷な」

「今度から言つちや可厭だよ」と少年は早や打解けて、「まア行くべえ、そら彼處に立つて居る、門の外の檜の木の下だ」

指示す指を追ふて目を注げば、椎や楓の枝の下、縁鮮やかな生垣越しに、微かに散見く衣の彩、松野子は妙に胸を跳らせながら、亦吉に跟いて門を出た。

「嬢さん、俺ア武州屋へ行つた来るだよ」

言捨てて少年は櫛の木蔭に合圖をして、一散に田圃へ驅出した。と見ると、袴を着たる青嵐に、長い袂を吹靡かせて、静に立現はれたは菊野子である。

「マア菊野さん」と松野子は擦附くばかりに寄り立つた。「如何したの菊野さん」

見れば菊野子は顔の色も冴えず、平素誇りを宿す眼は、恐怖を帯びるやうに急しく動いて、滑らかに動く其唇も、今日は固く閉ざられて、那邊とも知れず愁はし氣に見える。

何事にも自分勝手の舉動して、人たる軌道を歩まぬ彼女が、事實、音信不通の姉を訪ふのは何故か。情も名譽も満足を得て、得意の絶頂に達した彼女が、心に惱みあるものゝやう、太く萎れるのは何の爲か……松野子は此來訪を怪しむよりも先づ其妻が怪しまれてならぬのだ。て又話を重ねて、

「菊野さん、何か大變な事でも出来て？」

「え、私因つた事が出来てよ」と四邊を見廻して「姉様、色々と相談したい事がある」

ますから、町まで行つて下さいませんか」

一旦辱しめて罵つて、義絶の餘儀なきに至らしめた者が、今更何の相談か……と松野子は言度かつた、が其打萎れた態を見ると、怨言より憫れみが先立つて、我知らず聲が和らいて来る、て、

「町へ行くよりか、私の室へ入りなさい」と語調に親情を含めて言つた。併し菊野子は頭を掉つて、

「いえ。河本家へ入れる程なら、姉上を呼出しやしませんよ、と言つて、私の寓所でも爲れないし……爲様事なしに來たのですから、之から直ぐに被來て下さい、え姉様、私一生のお願いですから」

「然らね」と松野子は考へて、「黙つて行つちや都合悪いけれど、和女の話も大事らしいし……可いわ、一緒に行きませう、歩きながら話させよう」

「被來て下さるの？ 姉様済みませんねえ」

姉妹は伴れ立つて街道へ出ると、初夏の明るい日光が、洪水の如く地に漲つて、森も林も田も畑も、限りなき生氣を呈して居る。道は帯の如く緑野に展びて、前面に見ゆるのは、水車の車輪に日が射すのである。鳥の聲、水の音、水車の廻る響きさへ、撓まず働けと言ふやうに聞えて居る。道は鍵の手に曲つて、河本家の門が見えなくなる。松野子が先づ口を開る。

「菊野さん、もう誰にも聞かれる氣遣ひがないから、如何な事が話して下さい」
呼ばれて菊野子は、目覚めたやうに頭を擡げて、

「言悪い事だけでも、姉様笑はずに聞いて下さい。實は高藤の事ですがね……」と語
淀んで姉の顔を瞥見して、又足許を見詰め、「曩日お話しした結婚の事ね」

「其事が如何かして？」

「疾に式を擧げる約束なのに、都合が悪いから待て〜と言つて、今まで延引になつ

て居たの……だから私も都合が悪いなら爲方がないと思つて、靜然と待つてたてせ
う、處が今朝妙な手紙を寄越したのですよ」

「如何な事言つて来て」

然り氣なく尋ねたが、松野子は電流にても觸れたやうな感がした。夫は婚約が破ら
れたのではないか……と斯う思ふ刹那の感じて、而して夫が眞實ならば、如何に嬉しか
らう、と云ふやうな心地がするのであつた。て注意深く妹を見詰めると、彼女は長い
息を漏して、

「其手紙で見れば、高藤さんが戦地へ行くんですつて」

「戦地へ？」と松野子も流石に驚いて、「如何してとせう、高藤さんは官職を有つて
るぢやありませんか」

「私も然う思ふのよ。地方官なんかと違つて、本省の高層官なんだから、召集になる
まいと思ふけども、手紙で見りや、官吏でも召集されるので、既う近々行かなさやな
るまいから、仕度をするやうにつて、内命があつたと書いてありました」

「まア然うてすかね。高等官でも召集されるんですかねえ。夫て菊野さんは、如何しやうつて考へなの？」

「夫に就いて相談を願ふのよ」と最と語調を沈めて、「夫も結婚した上なら何だけれど、此儘行つて、萬一戦死でもされては、私、世の中に頼りがなくなるから、姉上にも考へて貰つて、出征前に式を挙げたいと思つてね」

「相談つて其事なの」

松野子は聲は良高かつた。最初、あれ程反對したのに、又もや斯る相談を持掛るとは、餘りに人を踏附けて居る……と一時赫となつたのであるが、また心を鎮めて考へれば、流石哀れに思はれぬのもまい。我儘な氣性の妹だから、若し高嶽に別れてもするならば、如何な事を仕出來すかも知れぬ。假令頼りない身になつたとて、我と同じく河本家の厄介になる事は、逆も爲し得ぬのであらう。と松野子は心中で自問自答して、哀れみ深く妹を見た。

「ぢやア、早く結婚するには、如何すりや可いかと云ふのですね」

「然うなの。私考へが附かないから」

「私だつて考への附様ないのよ。元來此結婚に不同意なのだから」

「ぢや考へて下さらないのね」

「いゝえ、不同意は不同意だけれど……真に如何したら可いものでせうね」

姉妹は同じ事を繰返すに過ぎなかつた。暫くすると、言合せたやうに足許のみ見て、うつら／＼と歩くのだが、四邊が騒がしくなつたので、よと目を擧げて見ると、何時しか高澤町に出て居るのだ。

(四)の三

町中は活氣を溢らして居た。如何なる軒にも國旗が閃めいて、人は店頭や辻々に集まつて、喜悅に面を輝かして居る。而して占領、戦死、吶喊など云ふ語が、數ば耳を打つのである。

松野子は急に勢づいて言つた。

「菊野さん、和女號外見たんでせう」

「いゝえ、私は號外どころぢやないのよ」

「だけでも知らずには居られませんよ。さア教會の前へ行つて見ませう。彼處の店の話を聞きや、大層戦死者があると言つてたやうだから」

松野子は妹を促して先に立つた、教會は南町の中程で、佛蘭西人の宣教師が居るのであるが、最初は露佛接近の關係から、太く町民に嫌忌されて、信者の中にも、國を憂ふる輩は敵と同盟する國の宗教は、勢ひ捨てねばならぬと言つた者もある。宣教師此に至つて大いに周章てた。先づ、我が天主教は政治と何等の干係がないと説き、また神は正しき者に福すべし、正義の爲に戦ふ日本は、勝利を得る事疑ひないと叫んだが、人は然して感動しなかつた。其處で、之では不可ぬ、尙少し具體的にして見せねばならぬと考へて、東京の某通信社から戦報を取つて見せる、一戰ある毎に新聞をして、祖國の爲に戦ふ勇士の祝福を祈ると云ふ人氣取りを遣つた。斯くして各方面の戦報は、郡役所よりも町役場よりも、眞先きに此教會の前に貼出されるのである。

町民は其巧妙な爲方に心が解け、却つて尊敬と感謝を拂ふ事となつた。隨つて信者の數も太く殖えた。

姉妹は程なく會堂の前に立つた。見れば入口の左方に、急造の揭示板が建てられて、夫に筆太に書いた朱點附の紙が貼られてある。道行く人は足を淀め、容易ならぬ顔して仰いては、忽ち満足の眼を光らして、萬歳々と連呼する。それは大本營の南山奪取の戦報で、頑強なる敵の抵抗から、勇敢なる我軍の大舉攻撃、金州灣に於ける砲艦の掩護砲撃から、我が各師團の苦戦の状まで具さに記して、我軍の死傷總て四千を超ゆると註されてある。

其中に貞愛親王殿下の御名が見えたので、松野子は頭に水注がる、心地した。誰も知る通り、殿下は近衛師團長に渡らせらるゝので、其下に屬する憲太郎や京治も其處に勇戦したに疑ひないのだ、とすれば二人の身の上は如何であらう。若し四千有餘の死傷者中に、二人も含まれて居はせぬか。

斯う思ふと身が硬ばるやうで、物言ふ事も叶はぬのである。折しも會堂の中から

は嘔吐するオルガンの音に伴って、高らかな讃美歌が聞えて来る。

「姉様、些時入つて見ませうか」

「菊野子は胸の惱みに堪へぬやうに、其美しい眉根を寄せて言つた。

「然うてすねえ」と松野子は力なく、「入つても可いけども、私等は信者でないんだから……」

「信者でなくても可いのよ。教會ですもの誰でも入つて行けますわ」

會て宗教を思つた事ない松野子は、何故か不思議に心が動いた、て妹の誘ふまゝ、石段を上つて入つて見ると、丁度オルガンも讃美歌も已んだ處で、黒い僧衣を纏ふた髯の精い、灰色の眼をした宣教師が、高い壇の上に立つて、聖書を前に開き、何やら饒舌つて居るのである。

其處へ、思ひも寄らぬ美人が伴れ立つて入つたので、逸早く認められた二三の人が、珍らしさうに眼を向けると、其眼が外の眼を誘うて、半ば以上が振向くのである。

(四)の四

姉妹は極悪い思ひをしながら、一隅の腰掛に並んで凭けた。孰れ劣らぬ紅白の花薔薇、品位と艶容と並び咲いて、會室内は俄に甘い香氣に満ちた心地である。

姉妹は膝の上を視詰めて耳を澄すと、發音の如何はしい、而も調子の可い宣教師の説教が、高い天井の反響を起して、流暢に聞えるのであつた。

「神様は吾等に向つて、最も正しい、最も困難な仕事を下しになりました。日本の國民……天主教を信する多くの人は、其目的に向つて進んだ事があります。今月廿七日の南山の大戦争には、此町から出た勇士が、勇ましい戦ひした事疑ひありません。

私電報見て考へました、南山の戦争誠に惨烈で御座ります。四千人の勇士を犠牲にして占領した日本軍……斃れた勇士に大きな信仰ないと、出来る事ありません、其信仰は同胞を愛せよといふ神様の教へて御座ります。祖國の爲に正しく斃れる……此大きな信仰は、人類の幸福の爲に十字架に上つた基督と同じ事あります。昔様の中には、

子や同胞を戰場に出して居る方も御座りませう、又其子なり同胞なり、戦死した人がないとも限りませぬ、何時戦死したと告げて来るか知れませぬ。然う云ふ方には誠に氣の毒で御座りませけれども、信仰の爲に死ぬ程幸福な事御座りませぬ、日本の勇士の死は、眞と善とて御座りませぬ。而して其眞は人の靈魂を高くし、又其善は東洋の文明を増進するもので御座りませぬ。祖國の爲に動く云ふ事は、即ち神様の爲に動くのであります。神様の爲す儘に動く事御座りませぬ」

堂内は間然として呼吸の音さへ聞えぬのである。神の爲す儘であると云ふ語、島渡解り悪いのであるが、併し、誰か一種の意味を感ぜず此語を繰返し得るものかあらう？ 誰しも感動の頭を俛れて、深い考へに沈むと見えた。其中にも松野子は、坐るに涙の浮ぶを禁じ得なかつた。宣教師の説教は、よくも理解されぬけれど、何か高い處で叫ぶものあるやうに思はれ、同時に言ふべからざる不安の念が胸を擾亂すやうに感じた。あゝ章治は如何したらう、遠太郎は無事であらうか……松野子は二人の身と思ふと共に、其處に居堪らなくなつて來た。

て密と妹を見て、聲を秘めて、

「菊野さん、もう行かうぢやありませんか」

「行きませう、私此様な處大嫌ひよ」

姉妹は足音偷んで其處を出た。外には尙二三十の人が佇んで、戦報の強札を見て居るのである。

群集は道を開いて姉妹を通した。街路に出ると日は稍傾いて、道の半ばは日陰になつて居る。姉妹は一言も交さず、深く考ふる面色で、高澤町へ引返へすのである。

やがて南町と高澤町との四角に出ると、後の方から、

「嬢さん〜」と呼びながらバタ〜と追駈けて来るものがある。姉妹は立定んで振り返ると、夫は例の亦吉で、一分判の頭からポツ〜と湯氣を立て居る。

「亦さん如何したの」と松野子は莞爾した。

「俺ア嬢さん探しに來たよ。旦那様から電報來たから、嬢様探して來いつてよ。武州屋の旦那も來てるんだよ」

「えッ電報が……」と松野子は顔色變へて、「菊野さん、私歸りますよ」
 「姉様マア些時……」

「明日私が行きますから……」マア亦さんお來。菊野さん左様なら
 松野子は驚き顔の妹を其處に残して、石原村へと足を早める。

(四)の五

松野子が河本家に駈着けた頃は、三時少し過ぎて居た。彼女は頸汗の汗を拭き池んだ襟を繕うて、勝手口から入つて行くと、屋内は何となく騒がしい物の氣勢、奥の一室に男の聲がして、飯焚女が縁側を踏躡かして歩いて居る。

彼女は早くも吐胸を衝かれ、怖る／＼奥の室に入ると、今しも、頭の禿げた分別顔の、武州屋の主人と對話中のお近が、足音聞いて振向きさま、

「マア松野さん、此方へ來て下さい」と呼入れる。

「は……」と松野子は膝を突いて、「小母様、電報が來たつて眞實ですか」

「え、夫て呼びに遣りましたがね」とお近は客の前なる一葉の電報紙を取つて、「マア是を見て下さい、大變な事になりました」

松野子は戦々手にとり取つて凝と視る、と頬と顔の色を變へたのである。電報は所屬中隊長から發したもので、其電文は、

「御令息章治殿様、去る廿七日南山の堡壘に向つて突撃中、左手關節部に敵榴彈の破片を受けて良重を負傷せられたり、左手は經過如何に困りて切除するやも瀕り難けれど、生命には別條なかるべし」

と記されてある。松野子は眼を潤ました。

「左の手を斷るつて……小母様如何したら可うしてせう」

「如何も爲様がありません、此上は死んでさへ呉れなさや、マア爲方ないと諦めますがね、松野さん、もつと困つた事がありますよ」

「困つた事つて……」

「何卒心を落着けて下さいよ。貴女に身を懸くされちゃ、私困つて了ひますからね」

慰めながら臍甲斐なくも我から萎れて、又一通の電報を出した。

「兵に可いんですね、落着いて見て下さいよ」

「はア如何な事があつても……」

健氣に言つて手に取つた。動悸が烈しくなつて渾身が震へるが、ジツと堪へて下すと、彼女は嗚呼と叫んで、漏れ出る感激の聲を呑んだ。大粒な涙がハラ／＼と、電報紙の上に落ちたるのである。

其一通は章治が發したのであつた。文句は頗る卒直で「予は敵弾の破片で左手を失くして、野戦病院に收容された、痲疾となれる故不日内地に後送さるべし、併し此日を以て少尉に任ぜられたれば御安心あれ、渥美は予の目前で戦死した、同日中尉に任ぜらる、御姉妹へ弔詞を申す」と記してあるのだ。

「お氣の毒な事になりました」とお近も臉を拭つて「お兄様はよく／＼運のよい方て……真に可哀相で御座ます」

「何と云ふ不運で御座ませう」と松野子は電報を疊んで眼を瞑つた。

「御有理な事で……」と武州屋は最と分別臭い顔になつて、「お氣の毒申上様もありませんが、まアお諦めなさい、名譽の御戦死だから、中佐様も草葉の陰でも悦びて御座ませうて」

「有難う御座ます」と頭を下げたが、松野子は其名譽の戦死と云ふ一語が、お世辭らしく聞えてならなかつた。

「それだね松野さん」とお近は呼掛けて「兎も角も、菊野さんにも知らせなさい。手紙を書くなり、其電報を持たして遣るなりして、早く知らせなさいませんよ」

「はア手紙を……手紙を書いて遣りませう」

と松野子は猶豫もなく起上つた。彼女は妹に知らするよりは、人の見ぬ處で泣度るのである。

(四)の六

松野子は居室に入りさま、崩る／＼如く机に坐つたが、筆も執らず紙も展べず、暫く

呆然と眼を据ゑて居る。

怪しきは運命の絲なるかな……と彼女は先づ心の中で言つた。覗いた例もない教団堂に入つて、宣教師の話に耳傾けたのも、又其説話に動かされて、得知らぬ涙を淨へたのも、威な斯うなる前兆であつたらうと思はれる。

嗚呼！願れば僅か二年の間に、父を喪うて零落の淵に沈み、身も心も冷い中に、頼りに思ふ祖母にも死別た。妹は我に反き、弟はまた異域の鬼となつて、可憐しい男は不具となつた……弱い女性の身を以て、克く此大打撃に堪へ得るであらうか。酒れむべき松野子が、若し武士的の薰陶を受けなかつたら、恐らく失望の餘り發狂するか、自暴を起して墮落するか、何れ暗い境に落ちたであつたらう。

良久あつて彼女は心を取直した、徒らに悲歎に取亂さるゝ場合でない、先づ妹に凶變を告げて、夫から近を慰めねばならぬ……と獨語ちて、早速手紙を認めるのである。

て其を持つて居室を出て、六造爺を使ひに出して、再び奥の室に入つて行つた。す

ると、「松野さん」と又ち近が呼掛けて、「未だ貴女に言はなかつたのですが、武州屋さんに迎ひに行つて貰はうと思ひしませぬ」

「章治さんですか」と松野子は怪訝顔した。

「然うです、陸軍の都合を聞いて、宇品か佐世保まで行かうと思ふんで」と武州屋は煙草を燻らして、「免役になる程の負傷をすると、歸郷療養とか出来るさうですからね。御存知の事と思ひますが、私は先代から御恩になつて、まア如何か遣つて行けるやうになつたから、一つ御恩返しの意味で、お迎ひに行く心です」

「恩も何も無いけれど、貴方の外に頼む人がないかのたら、何卒宜しく願ひます。金は出来るだけ都合しますから、何卒大切にして伴れて来て下さい」

「可うがす。無理に都合しなくても、私の方で如何かしますから」

「有難う。夫てね、何處で逢へるのか知れないけれども、若し容態が良くないやうだつたら、至急電報で知らして下さいね。何卒、死なずに歸つて呉れりや可いが……」

「小母様、御心配なさいませすな、大丈夫で御座ますよ」と松野子は慰めた。

「存命で歸つても、もう不具になりましたからねえ」

とお近は潜然と涙を流した。全體悲しみと云ふものは、慰められる時に暮るものだ、然なくも又、我より他人の大きな不幸を探つて、我が悲しみを小さくするは、凡夫の常とする處だが、お近も此例に漏れぬのだ。彼女は弟を喪つた松野子の心中を思ひ、強ひて自ら慰めて居たが、さて今人に慰められて見ると、世の不幸は自分一家に集つたやうで、寂寥も悲しみも、新たに加はる心地がする。

「内儀さん、心配するに及びませんよ」と武州屋は又煙草を喫して、「何も泣く程の事はありません。貴女が泣きなやならんてなら、弟様を死した嬢様は如何します」

「然うでしたねえ」とお近は涙を拂つて、「済みませんでした、堪忍して下さいさうよ。私だつて國家の爲つて事は知つて居ます、だけれども、私ばかりでなく、一人息子を戰爭に遣つてる人は、既う顔も見られない、聲も聞かれなかつたら、誰だつて國家の事を忘れませうよ。悲しい事は誰しも悲しいのですからね」

「御有理です」と點頭して武州屋は煙管を叩いた。「私の妹も三男を戰爭に出して居

ますが、夜の目も睡ずに心配して居ますよ。何しろ六人から子があつて、加之貧乏と来て居るから、一人位失くなつて呉れる方が、生活が樂になつて可いぢやないかなんて、始終馬鹿にして居ますがね、其處が矢張り親心で、何人あつても惜しいもんですてな、ハ、ハ、ハ、」

「血を別けた子ですもの、要らないものがありますものか」とお近も微笑みながら言つた。

「然うてせうて。すると私なんぞ……」と言ひ掛けたが、急に點頭を轉じて、「時に内儀さん、出發の日限ですがね、何日頃出發ことにさせうな」

「成る可く早くして貰ひませう。早く行つて、船の着くのを待つやうにして……」

「ぢや旦那（章治の事）へ電報を打ちませう。日限の分り次第知らして貰ふやうに……」

「何卒然うして下さいさう」

「可うがす、其返電に依つて出發するとして」と武州屋は主人を仕舞つて、「ぢやア私も

大抵用意しとかなきやなりませんから、今日は之でお暇をします。お嬢さん、此と遊
びに被来て下さい』

「有難う御座います。何分宜しく」と松野子は合禮した。

やがて彼女は、お近と共に武州屋を見送に出た。其處でも又、宜しくの二三度も松
返して、二人は以前の室に歩を向ける。

「章治は存命で歸りませうか」とお近は歩きながら言つた。

「え、大丈夫で御座いますよ」と松野子は點頭いた。

「だけれども、若し途中で變な事でもあられた日には、私達は如何したら可いてせ
う。常陸丸だの佐渡丸だのつて、怖ろしい事ばかりありますからね」

「ですけれども、敵の軍艦は既に出ますまいから、滅多な事はありませんよ」

松野子は斯う慰めたが、「私達」と云つたお近の語が、不思議に鋭く胸に應へた。自
分と章治とは赤の他人である。章治の生死は直接自分に關係を及ぼさぬ。夫を私達と
呼んで自分まで其埒内に入れるお近の胸には、如何なる考へがあるのだらう。夫は明白

に知るべきやうもないが、私は何せ不運な身、乃て此家を去らねばならぬであらう。
と思ふと、又憲太郎の戦死が、新しい悲しみを齎らして、妹の上が思ひ出されてな
らぬ。松野子は立留つてお近を視た。

「小母様、私些時妹に遇つて來ますから」

「あゝ然うでしたつけ。未だ手紙を遣らなかつたでせう」

「いゝえ、手紙は爺やさんに持たせて遣りましたけれど、些時逢ひ度う御座んすか
ら」

「ちや行つて被來い、私からも宜しくと、菊野さんに弔詞を述べて下さい」

「はい夫ちや行つて参ります」

松野子は其處から直ぐに踵を回し、着更もせずに屋外に出た。古びた洋傘に西日を
避けて、舊御殿へと通るのだが、「私は今後如何しやう」と云ふ疑ひが、烈しく強く胸
を打つ。

主人が不具となつた河本家に、何時まで厄介になつて居られはせぬ。と云つて外に

行くべき的もないが、世の中は案外廣い、随つて人の手は何處でも要る……政治が
が歸つたなら、私は病院の看護婦にてもなるとしやう。

(五)の 一

鐘樓の瓦を輝かした夏の日が、今し方本堂の後に落ちて、廣く寂しい北院の境内
は、裏山の林から暮れ初めた。

丁度一降雨あつた後で、滴露の乾かぬ樹々の梢は、高きは僅か夕日の光りを受け、
低きは最と翠の色を増して、目覚むるばかり爽やかである。裏山の杉木立や、左右に
横がる雑木の繁みには、紫色の霞が満ちて、奥深い本堂は、物の形色も分かれ程に
なつた。只、本尊前に點る紙燭が二つ、漆平と金色の佛具を照らして、經机でもあら
うと思はるゝ邊に、弱く光るは蠟燭の火光で、其前に白衣の人影の動くが見える。
庫裏に續く長廊下から、夕餉を告げる太鼓の音が、山内の窓を反して葉々と響いた
時、渥美の祖母が新墓の前に、肅然と頭を垂れた松野子は、夢から覺めたやうに顔を
掻けて、傍に眠む妹と凝と眼を見合した。何れの面も愁ひの雲に鎖されて居る。
「既ら歸りませうね」と菊野子が先づ立上つて、「さア姉様、暗くならない中に歸りませ

「え、行きませう……だけでもね、私斯うして墓の前に居ると、祖母様の顔が見えるやうで、何處で何をして居るのか自分の事は全然忘れて了ふのよ」

松野子は何物をか求むる眼光で、墨色薄らいだ墓標を視詰める。

「私だつて然うですわ。祖母様には色々苦勞を掛けただから……」と菊野子も悄然とする。

「私も然うなの。祖母様ばかりぢやないわ、亡父様にも苦勞を掛けて……」と姉は最ど面を暗くして、「亡父様と言へば當地へ引越して来る時、菊野さんと二人で青山の墓参に行きましたつねね。節は違ふけれど、彼時も今時分て、墓に居る中に口が暮れで、歸途に月が出てねえ。私、彼時の事が思出されてならないわ」

と言つて松野子は恍然する——夫は如何にも感慨多き夕であつた。件慣れた都を見捨つべく、冷い墓地に落葉を踏んで、人の世の秋の淋しい別れを、父の靈に告げてから、未だ八月餘りに過ぎぬ。處が人の一生から言へば、氣長に歩む道中に、當時の体

熱を取るに等しい其短い月日の中に、路上に一基の墓標を立て、去るに難く、留まるにも亦難いと云ふ風情、昔日の事を想起せば、果敢ない一家の運命が、最ど果敢なく思はれるので、菊野子も流石に断然とした。

「真に詰らない身の上」と長い息を吐いて、「未だ一年にもならないのに、新しい位牌が二つまで出来たんだもの。あ、詰らない、私あの電報を見せて貰ふまで、兄様が死ぬだらう杯とは、夢にも思やしなかつたわ」

「私だつて同じ事よ。尤も、憲さんは戦死の覺悟で行つたのだから、存命で歸つて呉れりや、夫こそ儲け物だ……と然ふ思つて居たけれども、此様に早く死ぬなんて、夢にも思はれるものですか」

姉妹は憲太郎の爲に、心ばかりの佛事を營むべく、墓参に來た事は言ふまでもな

「まゝ行きませう」と菊野子は歩を移した。

「あ、歸りませう」と姉も踵を回して、「ねえ菊野さん、私斯うしてシツと眼を瞑れ

ば、憲さんの顔が歴然見えるのよ。如何かして見られるものなら、尙一度顔を見たいわね」

「見せて進げませう、私寫真を持つてるから」

「えッ寫真があるんてすつて？」と松野子は驚きの聲で叫んだ。菊野子は忽ち憤怒の面色したが、頓て何やら點頭して、

「可いわ。見せても可いわ。ぢやア見せて進げますから、一緒に寓所まで被來い。あれを見せたら、姉様に怒られるだらうけれど……」

「行きますから何卒」と姉は只悦んだ、最後の一語は、全く心に留めぬやうであつた。

(五)の二

姉妹は足早に山門を出た。道を久保町の畑中に取つて、三芳野天神の傍を抜け、庭御殿さして迎るのだが、様々の追懐談が夫から夫へと繰返されて、足の疲れも感じが

なく、早くも菊野の寓所に着いた。

互ひに語に針を含めた三月以前の事を思へば、迂迴に入られる場處ではないが、松野子は夫を思ふ暇がなかつた。心は偏へに可愛しさ弟の面影に馳せて、鷺島城の長い頸も、老郡長の胴羅聲も、全然耳目に入らぬ如く、導く妹の後に跟いて、例の名畫室へと入つて行つた。

「ア菊野さん」と松野子は坐ると共に急ぎ立てた。「早く憲さんの寫真を見せて下さい」

「あ、今出しますよ」

菊野子は机の抽斗から鏡を出して、西洋棚の扉を啓いたが、以前の熱心な顔色は、何時しか薄らいて居るのであつた。頓て儘氣に取出したは、四ツ切大の寫真で、紙の薄紙を除つて凝と視ると、忽ちビリ、と眉を動かして、

「ア御覽なさい」と投出すやうに置く。

松野子は低く拾つて打成る、と身には少尉の制服着けて、左手に劍鞘を、右に軍

帽持つて、屹然と立つた五分刈頭、凜々しい中にも微笑を含んで、今にも物言ひさらな弟の顔が先づ目につく。夫と並んで椅子に凭けたのは高藤兼夫、行絨袴着用の姿美しく撮つて居るが、松野子は之が爲に、可惜物に疵つけられた心地して、言はん方なく不快であつた。

「菊野さん、是私に貸して呉れませんか」

斯う言つたが、答へがないのでつと見ると、菊野子は西洋棚の前に坐つて、手紙やうのものを視詰めて居た。其膝の下には、葉書や書状が散亂して居る。

「え菊野さん、此寫眞貸して呉れるてせう」と松野子は重ねて問ふた。

「寫眞を？」と上の空、輝く眼光を尙も手紙に注いで、「借りて如何なるの？」

「憲さん丈け複寫させ度いと思つて……」

「兄様丈けを？」と始めて心に留めたやう、身を斜めにして姉を見て、「兄様丈け複寫すると仰在るの？」

「然うなの、私は憲さん丈けて可いから」

「高藤さんがあつちや邪魔になるの？」

邪魔どころか、見るも不快だと言度かつた、がジツと堪へて、

「不快つて事はないけども……佛壇に飾つて置くのだから、高藤さんがあつては困るわ。ね高藤さんだつて、佛壇に入れられちや、好い心地がしないてせう」

「關はないのよ。佛壇にでも入れるが可い……」と菊野子は腹立し氣に言つたが、忽ち手にせる書状を引裂いて、クル／＼と回めて投捨てた。

「如何したの菊野さん」と姉は呆れて眼を瞪る。

「餘り人を熬すから……可い加減な事はかり言つて、何時までも式を擧げないんだもの、私拒かしくてならなうのよ」

「だけれども約束を守りなへすりや、何時まで待つても可いてせう」

「姉様鳥渡……」と暫まて言はず進つて、室の一隅を視て耳敏てた。表玄関の方に腕車の音がして、竹垣傳ひに此方に来る。

「誰だらう」と呟いた菊野子の眼が光つた。

人車は裏玄関に停つて、客の訪ふ聲がして、急しい足音が出て入つて、今度は老部長が出迎へる音、而して二三語應答あつた後、客は導き入れられる氣勢である。

「詰らなS……」

と菊野子は又呟いた。待つ人の聲ならぬので、失望した體であつた。彼女は嘸と太息して、散亂した書狀を拾ひ集め、一々裏面を見て叮嚀に重ねて、又書棚の抽斗に納めるのだ。

姉妹は暫く黙然とした。互ひに言度い事が澤山あるが、對手の胸中を測るやうに、折々顔を合せては眼を落す。置時計の秒針が、静かな室の時を刻んで、彼は十分間も経つたかと思ふ頃、不意に縁側の障子が啓いた。

愕き見上ぐる姉妹の前に、ヌツと立つたのは部長で、後の方には、紋附の羽織を着た、四十五六の男が立つて居る。

「菊野さん高藤の許から執事が来ましてね」と部長は後向いて、「さア西野さん入りなさい、彼方が菊野さんで、此方が姉様だ、幸ひ姉様が在りやから、決定をつけるに都合が可からう」

「では御免を」

と西野と呼ばれた男は、小腰を屈めて室内に入る、と部長は「宜く御相談なさい」と言捨て、其儘縁側に出で了ふ。其舉動が餘りに簡單で且つ無禮なので、姉妹は物をも言へなかつた。

「初めてお目に掛ります、拙者は高藤家の執事西野爲作と申すもので……何卒見知り置きを願ひます」と切口上で手を突く。

「然うですか」と菊野子は権柄ぶつて、「何か御用ですか」

「左様で、些と面倒な御用を申附かつて……併し勿々好い景色ですな。建込んだ東京から参りますと、宛然泉水の魚が大海にでも出たやうで、壽命が延びる心地がしますな」

難澁しい顔に似氣ない愛嬌言つて、何かなしに扇をパチ／＼させる。

「あの如何云ふ御用ですか」と菊野子は又問ふた。松野子は一語も出さず控えて居る。

「只今……」と鳥渡頭を下げて、「夫は追々申上げますが、併し今度の戦争ぢや、何處も大した人氣ですな、東京などは勿々大變な騒ぎで、提灯行列の炬火行列のと、夫は／＼非常な賑やかさで。だが何て御座いますな、南山丈けても四千人からの死傷だと言ひますから、勝つには勝つ丈けの價を拂はんけりやならんて、我々の悦ぶのに引代へて、戦死者家族の人は、誠に氣の毒な次第ですな」

役にも立たぬ事をベラ／＼饒舌つて、息繼ぎの煙草を吸附ける。松野子は其様子を、他聞を憚る話と見て取つた、て氣轉を利かして起たうとすると、執事は周章で、押し止めた。

「まッ何卒お待ち下さい。實は其、誠に申悪い御用談で、貴女様にも御相談を願はにやならんので御座ますから、何卒まアお坐り下さるやうに……は、暫時お控えを願

ひます」

「姉様、何卒待つて下さい」と菊野子も絶るやうに言つたが、乃て吃となつて寫作を見て、

「では御用向を言つて貰ひませう、貴下は一體誰の代理で來たのです。衆夫様の使ひですか、高藤家の代理としてですか。オア夫から言つて下さい」

「高藤家の代理です」と執事は最ど剛く、「夫ではお話をしますが、實は貴女様と拙者若主人との、結婚の一機に就きましてな」

「結婚の事？」

菊野子は然り氣なく言つたが、早や顔色が變つて居る。

「左様、其事です」と爲作は横さまに頬を撫で、「至急お目に掛つて、話を定めて來いと云ふお吩咐で、大急ぎで参つたやうな譯で。は、」

「然うですか」と菊野子は少しく面色を和らげた。「ぢや何て御在ますね、結婚式の事なんですな」

「いや、式の儀では御在ません、所詮此結婚と云ふ事と、確乎と其、筋道を正して……まア何ですて、如何かして了はにやならんのですてな。若主人も近々出征の事になりませうて、旁々放擲て置けん次第でな。はい」

「夫て如何だと云ふのです」と菊野子は尙も爲作を睨む。

「其處で主人は其……拙者をお呼びになつて、兼夫は斯々いふ方と夫婦約束をしたさうぢやが、誠に怪しからん次第ぢや、名譽も身分もある者が、其様な不埒を働くと、實以て許して置かれん儀ぢや、就ては汝川越へ行つて、其約束を破談にして来い、と斯様に仰在いますて、已むを得ず伺ひました次第で……」

「お待ちなさい」と菊野子は急込んで叫んだ。「夫や御主人のお語が知りませんけれど、私は其様な事聞く耳は有ちません。兼夫様との約束は、他の方方の知つた事ぢやないんだから」

「御有理の仰せて……併し此事は若主人も承知の上ですから、何卒其意でお聞取を願ひ度う……」

「何て御在ますと？」と菊野子は聲震はして、「兼夫様も御同意で、貴下を考慮したと云ふのですか」

「左様で……夫は所詮老主人からの説諭に依て、今までのお考へをお捨てになつたので。いや斯う申したら、定めし御腹立たるだらうが、何も其苦い中と云ふものは、得て前後不見の事をするもので、夫が無理を通すと、老年に至つて後悔するもので御在ますよ。ハッハ、何も餘計な事を申して相済みませんで。處で今度の一件ですが、な、有やう申上げると、お二人が勝手にお定めなすつた約束……え、其自由結婚とか申すのが、老主人大嫌ひで御在まして、之ばかりは見通して居る譯には行かんから、汝行つてお断りをして来いとのお申附でな」

「お黙りなさい」と菊野子は身震ひしつゝ叫んだ。「貴下は役にも立たない事と言つて、人を辱しめるのですね。いゝえ然うてす、説諭がましい事を言つて、失禮ぢや御在ませんか」

「併し、夫も畢竟、貴女のお爲を思やこそす。無理に約束を通した處で、一家和合

「しませんと、掌櫃返しに毀れにやならんて、却つて苦しみを求めるやうなものだから、熟くお考へなさるが可う御在ませうて」

「も既う澤山です、其様な事聞く必要がありません、私は兼夫様にお目に掛つて、如何でも話を定めますから、貴下は之で歸つて下さり」

言ふかと思へば應乎と立つて、以前の抽斗を荒らかに開き、一束の書類を持出して、次ぎの一室に隠れて了ふ。

執事西野爲作は、呆氣に取られて眼を圓くした。物をも言はず反返つて居たが、程なく分判顔になつて、松野子の方に向き直つた。

「貴女、之や如何したものでせうな、逆も御承知になりますまいか」

「左様で御在ますね」と松野子は曇つた顔を擡げた、「如何云ふもので御在ますか、私元來關係しなかつたものですから……」

「は、ア、すると貴女にも御相談がなかつた……成程……」と小首を捻つて、「併て、拙者も見込がないと言つて、此儘歸られもしませんから、如何てせう、尙一度お目に掛

れるやう、お取計らひを得たいものですかな」

「然うてすねえ、夫丈けの事なら……可う御在ます。然う申して見ませう」

(五)の四

松野子は次ぎの室へと立上つた。元來此談に加はる心は微塵もない、いや聞くさへ不快に堪へないので、今までは耳も塞がばかりにしたが、さて又考へて見れば、妹が生涯の大事である。如何に甚く失望したらう、何れ程深く悲しむだらう……と思ふと、流石に憫れに感じられて、彼女は相談相手にはならずとも、多少慰めて遣らうと考へた、て襖を啓けて見ると、仄かに薄光線射す窓の下に、菊野子は俯伏して泣いて居る。

「菊野さん」と呼び掛けると、

「私口惜しいわ」と菊野子は濡れた顔を擡げて、「姉様、私、姉上に合せる顔がないの

よ」

「私の事なんか氣に掛けなくてね」と姉は低聲で慰めて、「あのね菊野さん、今の人が、尙一度和女に逢ひ度いつて」

「誰が逢ふものですか」と激語したが、手にせる二三通の書状を打反しつゝ、「此手紙は、皆氣休めに寄越したのよ。近々式を擧げるツて、彼様に固く誓つて居たのに、案山子見たいな者を遣して、失敬な事を言はせるんですもの、高藤さんも餘り酷いわ」
あゝ冷めたる戀か、夫とも餘儀ない事情あつての破談か、それは今、明白に知るべき由もないが、蜜の如き文字を列ね、夢のやうな空想の楽しい語を列ねた手紙も、一時の戯れてあつたかと思へば、餘りの口惜しさに心も燃える、菊野子は唇を噛んで、また新しい涙を流す。

「西野さんが待つてるから、何とか言はなきや不可せんよ」と松野子は所在なげに促した。

「可いから放抛といつて下さり。私は決して……決して彼の人造の玩弄物にはならなから」

「だけでも、然う言つて見るつて來たのだから……」

「ぢや斯う言つて下さい。お目に掛る必要がないから、直ぐに歸つて下さりつて。面して、誰が何と言つても、兼夫さんは私を愛して居るからつて、然う言つて下さいな」

「私は何程でも言へるけれど、一應木田村さんに相談したら可いでせう。彼の方だつて、一旦媒介人になつたんだから、今更知らない顔もされますまい。ねえ菊野さん、然うする方が和女の益よ」

「いゝえ、彼の人なんか既う頼みになりません、先刻の態度を見たら、大抵判明るぢやありませんか。娘までが一緒になつて、蔭で悪口言つてるのです、眞に彼様を憎らしい人つてありやしない。彼の人達は、自分の利益ばかり見る小人だから」

「然うね、彼の様子ぢや、逆も頼みになりますまいね」

「頼んで呉れと言つても、既う頼みやしないから、如何な勝手な事でもするが可い」
既早取附く島もない、松野子は又悄然として立上つた。

「ぢや兎に角然う言ひませう、眞に困つた事になつたのね」
 嘆じながら室を出たが、彼女は言ふべからざる淋しさを感じた。あゝ未来は既に明らかつてある。妹も遠からず此處を去らねばなるまい、自分も亦河本家を出ねばならぬ……とすれば姉妹は何處へ行くてあらう。一旦、不幸な運命に放された手が、又不運の縁で結ばれて、更に暗い浮世の底に、的もなく彷徨はねばならぬだらう。
 松野子は斯う考へて、思はず涙を浮べたのである。

(六)の 一

六月も早や下旬となつた。此月に入つてから、陸海兩軍の活動が最も目覚しくなつて、壯快な戦報が引さも切らずに耳を打つ。中にも、聯合艦隊の磐城子双葉灣の敵砲撃と、旅順港外に於ける驅逐艦の激戦とが、海に我が武士の花咲かして、陸には分水嶺の占領が、最も人を驚喜させた。國民は一報達する毎に踴躍して、何か華やかな方法を探しては、奮勃の氣を滿らすのであつた。常に活氣に乏しい川越の町も、數は提灯行列を催して、都の意氣に倣うて見せた。國旗は連日軒に閃めいて、提灯は夜に點し續けられ、只勇ましく華やかに、やがて其月も暮れやうとする。

其或日の夕方である。石原村の河本家は割れ返る程の騒ぎを見せて居た。遙々出迎へた武州屋から、今夜八時に歸着すべしとの電報が來たので、お近は東京まで迎ひに行つた。章治の負傷は左腕の外、同じ足部に一丸受けた事が知れて、又もやお近を泣かしたのであつたが、念に歸郷療養の願が聞届けられ、程なく歸着の事とはなつた。

郡長始め町の名譽職一同、村の縁故ある人々は、斯名譽ある勇士を迎ふる爲に、大舉して停車場に赴いた。留守は松野子が預つて、出迎人に振舞ふ物から、病人を容る座敷の始末から、總ての仕度を整へる。勝手の方には酒樽が列んで、病室には床が設けられる。臥つて横に見る床の間には、心づくしの花瓶一つ、香りの高き草花を、目を樂しめやうと活け置いた。歸着の時間に来て呉れと頼んだ醫者は、我も歓迎しては相濟まぬと、逸早く車を驅つて來た。

總ての仕度が整ふたので、松野子は醫師に茶菓を備め置き、二階に登つて村道を見渡した。屋外は既早夕暮れて、一路遙かに展びる果、赤間橋際の茅屋から、ほのぼのと煙が騰つて居る。室内は薄暗くなつて、入時を少し過ぎたけれど、章治の車は未だ見えぬ。

凝と村道を視る松野子は、宛ら熱病にても罹つたやうに、戦々と震へ出したのである。あゝ私は今後如何しやうか、と思ふと頃日お近に言はれた語が、事新らしく胸に應へる心地。「私は段々目が霞んで來るから、絨物は皆貴女がして下さい」とか、又一章

治は不具になつたから、貴女に世話を願ひます」などと、毎時口癖に言つた語が思ひ出される。此月の初め、妹と俱に北院に行つて、憲太郎の佛事を營んだ時、自分は看護婦にならうと決心して、密かに、其手續きを聞いて居たが、お近に然らざる毎に、怪しく舌が硬ばつて、折角の決心を告げる事も出來ず、何とはなしに暮して來た。松野子は章治を思はぬ日とはなかつた。而も其思ひは「私達は如何なるだらう」と云ふお近の嘆息を聞いた以來、一層烈しくなつたのだ。が今日は如何したものか、章治に逢ふのが怖ろしくてならぬ。あゝ何故であらう……と心の中で呟くと「お前は美しい菊野子の姉たるに過ぎぬ」と誰やら呟くやうな聲がする。

松野子は愕然と四邊を視て、吻と太息を吐いた……忘れはせぬ、自分は菊野子の姉たるに過ぎぬ、章治は妹を惹きたのであつた。章治は單に友達である、身にも心にも傷いた哀れの友達である。

又、長い溜息吐いて、何気なしに門前を見ると、錠手に纏る生摺傳ひに、錠丸の如く驅來る小さな姿、夫は前觸れの亦吉が、御注進の役で驅着けるのだ。

松野子は周章して階子を下り、玄關に馳出て見ると、亦吉は顔の汗を拭ひながら、息急切つて立つて居る。

「亦さん、もうお着さになつたの？」

「うむ来たよ、もう高澤橋まで来た頃だ、嬢さん下駄持つて来るか」

「あゝ何卒」と松野子は式臺に下りた。

家内は急に騒ぎ出した。醫師は玄關に飛出す、手傳ひの人は門前に出る、松野子は下駄を穿いて其處を出ると、はや車の音が聞えて来る。

(六)の二

三輦の車は徐々と門を入つた。車夫は密と鞭棒を下す、と頼いて二十人餘りの男女が、ゾロゾロと門を入つて来る。

「お嬢様、只今」

と聲掛けて、先づ車を下りたは武州屋である。松野子は「御苦勞さま」と答ふるの

も上の空、次ぎなる車に目を馳せた。夕暗籠めて顔も定かに分ぬけれど、夫は章治と見て取つた。白い帽に白い衣物、頭に一筋かゝるのは、腕を吊つた布であらう。只何となく忌々しい態に、彼女は早や胸の潰るゝ思ひして、頓に物をも首へぬのだ。

醫師は早速玄關を下りて、章治が車の傍に寄つた。お近も何時か下立つて、醫師に挨拶するのである。

「挨拶は後の事だ……如何です歩けますか」

「逆も歩けます」と章治の聲は案外訝えて聞えた。

「然うてせう、あゝ誰か戸板を一枚」

醫師は後の方を見た。豫て用意の釣臺代りの戸が一枚、蒲團を敷いて持來される。醫師は、成る可く語を交さぬやうと、一同に注意した。松野子は簡單な挨拶して膝に膝懸布を除つて遣る、章治は六造と醫師とに扶けられて、扉の上に横はつた。此悲壯な惨たらしい凱旋を見て、出迎ひの人々は聲を呑んだ。臺所に列ねた振舞酒も徒らに冷めて、やがて章治が昇き入れられると、一人去り二人去つて、門前に動くものゝ

影も絶え、只夏の夜の静かさを、遺水の音のみが破つて居る。

扉は病室に入つた。お近は松野子の手を藉りて、章治を床に入れるのである。

蒲團も枕も軟かなのを揃へて置いた。松野子は痛々し氣に横はる章治の頭を持ち上げて、密と枕をさせて遣る。お近は薄い白毛布をフワリと被けて密と坐ると。

「松野さん、貴女の御恩になりましたね」と章治は枕越しに目を舉げる。

「S、え、私こそ色々……」

と言半して松野子は後句を呑んだ、初めて熟く見る其面相、眼が窪んで色蒼褪めて、肉附の良かつた頬が削つたやうに殺け、骨立つた身が半分ばかりになつたやうだ。松野子は其惨い姿を見ると共に、胸が迫つて眼が潤んで、言繼ぐ語が出ぬのである。

「旦那様、大層痩せなすつたなア」

と六造は縁側に手を突いて、伸上つて寝顔を覗いた。あゝ此哀れな負傷者が、半年以前に在りし如く、健かな身になり得るだらうか……誰しも斯う思ふのであつた。

「六造、お前にも難儀させたな」

「何難儀な事あるべえ。旦那様の事思へば、俺まるて遊んでるやうなものだ。俺なんざ何の役にも立たねえが、有難えのは嬢様だ、旦那様の居ねえ中、奥さんのやうにしてな……うんにや女房だつて彼様は出来ねえ、夫はく能く親切にして呉れね」

「まア爺やさん其様な事……」と松野子は赤くなつた。

「僕も大抵知つて居る」と章治は眼を閉ぢて言つた。

「ては徐々診ませうかね」と醫師は先づ検温器を出して、「お話は後にして、まア拜見する事にしませう。些時、金盥に微温湯を持つて来て下さい。繻帯を捲き代へますから。夫から外に盥を一ツ」

「はS……」と答へて松野子が立上つた。暫し其場を外して、眺る胸を鎮めやうと考へたので。

(六)の三

醫師に命じられた道具は、先づ六造に運ばせて、松野子は愛時心を押鎮めた。臺所

には武州屋の主人が頭になつて、手傳ひの近所の衆や、見舞に來た知己と共に、密々と酒を酌んで居る。

松野子は彼是十分ばかり経つてから、再び病室に入つて行くと、醫師は近と六造に手傳はせて、繻帶を捲代へる處なので、洗滌藥の強い匂ひがブン／＼と鼻を衝く。

「嬢様……」と六造は早くも認めて、「些時來てお呉んなせえ。なア先生様、俺が手傳つちや痛がるべえから、嬢様にして貰ひますべえ」

「そ然う夫が可い」と醫師は巻繻帶を手にして振向いた、「ちや願ひませう、さア何卒早く、貴女のやうな和かい手でないと、病人が痛がるから……」

「は……」

と言つたが松野子は聲が詰つた、立放れた六造の跡に坐つて、凝と章治の腕を見る。切斷までには至らざれ、腕の肉が殺げ去つて、柘榴のやうになつた底に骨らしいものが見える。お近は餘りの慘らしさ見るに堪へて、眼を瞑つて頭を俵れて居る。

「手首を持つて密と擧げるのですよ。可いですか、薬時の間だから……」

「これで可う御在ますか」

松野子は指圖通りに手を取上げた。

「結構々々。ちや捲きませうよ」

醫師は繻帶を捲き始めた。章治は窪んだ眼を松野子の横顔に注いで、苦みも感ぜぬものゝ如く、折々微笑を浮べるのである。

熱練なる醫師は、瞬く間に捲き終つた。夫から左足の傷所（それは大腸貫通銃創）にも同じ手當をして、手を洗つて座に就くと、お近は吻と安心の息を吐いて、丁寧に禮を述べる。

「別に御心配には及ばん。河本さん、大分貧血に傾いて居ますから、澤山滋養物を食つて、悠りして居られるが可いですよ。何有、左の手位利かなくつたつて、男子の事業に障りはありません」と身柄不相應の氣焔を吐く。

「然うです、腕の一本位なくつたつて」と章治は微笑んで、「幸ひ右の手が利きますから、大した不自由もないでせう」

「不自由でない事があるものかね」とお近は容めるやうに、「如何に氣が採めるか知れないけれど、夫でも断つて了はれるより勝たと、まア諦めて居るが可いよ。ねえ先生、手の方は爲方ありませんが、足の方は如何で御在ませうね」

「大丈夫三週間で全治します。ては之でも暇を占めるから、折角大切になさう」
 醫師は一同が感謝の辭を聞いて、やをら坐を放れたが、何やら點頭いて松野子を見た。

「お嬢様、失禮ですが些時お顔を……」

「はい」と素直に立上ると、醫師は縁側の盡頭まで導いて、さて良物々しく、

「お呼立てして失禮でしたが、鳥波お知らせして置かなさやならんですて」

「はア……何か心配な事でも？」と眼を据ゑる。

「いや大した事もあるまいと思ふが、お耳に入れとかんと喚驚なさるだろうと思ふて……何も熱が出さうですてね、左様申に依ると大熱を發するかと思はれますから、氷嚢の用意をしとかにやなりません。可うがすか。お内儀を驚かせんやうに、貴女存込

んで居つて下さう。何、心配する程の事はないから、成る可く安靜にするやうに」

「畏りました」

「夫から薬ですが、頓服を進めますから、熱が出たら服まして下さう」

醫師は尙二三の注意を與へて去つた。松野子は玄關まで見送つて、又病室に取つて返すのだが、章治の傍に坐るのが、後讀くてならぬのである。

(七)の一

章治歸休の噂が、川越町界隈に擴まつて、辯口の達者な若者どもは、彼が南山突壁に於ける戦功談を、見て来たものゝやうに傳へ廻つた。之が爲に、石原村は急に輝き出して、人は我が名譽として他に誇つた。

章治歸着の翌日であつた。軒提灯點し列ねた志義町の方から、停車場道として一散に、飛ぶが如く驅來る一輛の腕車があつた。

燈火の花の下を抜けて、一ぜん飯屋と居酒屋の多い暗い停車場通りの町に入つて、今しも唯ある宿屋の前まで來ると、車上の人は俄に蹴込を踏んで、

「車夫さん、既う可いよ、此處で可いよ」と熱れて言ふ。

車夫は身を反らして踏堪へ、汗の流るゝ顔を振つて、

「お下りになるんですか」

「あゝ下して呉れ、早く下して呉れ」

急込んで言つて下り立つと、貨錢を渡して立去らしめ、扱すたくと足を早める。

飯屋の店頭を漏るゝ火光に見れば、絹物らしい單衣に、草履穿きの華奢な姿、束髪の頭に挿した白い花が、薄暗がりにも目に着くのである。

路傍の木の下に忍び寄つて、街燈暗い停車場道を透し視る、と數歩の前面に洋服姿の男一人、細い洋杖を打振り、悠々と歩くが見えるので、女は足早に樹下を出た。

「高藤さん」と呼止めて、つと傍に寄り立つた。女は言ふまでもなく菊野子である。

「菊野さんですか」と高藤は驚いた様で、「如何したんです、何爲に來なすつた」

「言残した事があるからです」

「言残した事？ 彼丈け話したから、既う言ふ事がない筈ですが」

「貴下になくても、私の方は何程もあります、何卒寓所まで歸つて下さる、お下り」

「夫や困る、終列車の出るまで、もう四十分しやないから」

「ちや停車場で話します、いゝえ此處でも可う御在ます」

「待合室や往來で、一身上の談話がされるものですか」と抗つたが些時考へて「ぢや斯うして下さい、先刻話した通り、僕は如何でも今夜歸らなまやならんてすから、手紙で寄越して呉れるなり、電話をかけて下さるなり、何卒然う云ふ事にして、今夜は此儘歸して下さい」

「不可せん、貴下は逃げるのです、貴下の心中は成り知つて居ます。其様な事を仰がつて、逃げて了ふお心でせう。いゝえ夫に違ひありません」

「馬鹿な……」

と言つたが高藤は打困じた。小荷物を携へた男女が、ゾロ／＼停車場に詰掛ける。腕車も數ば傍を通る、而して何れも此二人の姿に好奇の眼を注ぐので、中には舌鼓して通る者さへある。されば見知越の者がなにも限らぬ、若き女と路上の立話、而も狂氣染みた菊野子の語調では、如何なる事を言ふかも知れぬ、若し知人にても見られれば、飛んだ耻辱を曝すと云ふものだ、爲方がない、些時近處の旅館に入つて、宥め諭して歸すとしやう……。

高藤は斯う考へて面を和らげ、

「夫ちや些時其處の旅館に入りませう、ね入つて悠々話させよう」

「旅館へ？」と指す方を見て、「あの汚い家へですか。え、可う御座います、おや貴下先になつて下さい」

二人は「御とまり」と書いた行燈の、太く煤びた家に入つた。寢惚顔の女中が「入らつしやう」と聲かけたが、やがて二人の姿を打仰ぐと、驚いて眼をパチ／＼する。

(七)の二

二人は狭い階子を上つて、汚苦しい二階に通つた。燈は赤く天井は黒く、壁に石版刷の無争繪を張つた其汚い一室に、露を含んだ花の佳人と、胸に金銀光る洋服の紳士とが、相對して坐つた様は、此家には正しく空前の珍事であつた。

髪の亂れた汗臭い女中が、茶菓を持來して出て去くと、高藤は紙貫に火を點けて、少し角張つた語調で問掛ける。

「ちや伺ひませう。何て言發した御用と云ふのは？」

「夫は段々申しますけれど……」と菊野子は穴の明く程高藤を視て、「貴下は冷やかな人ですねえ」

「ハッハ、何を仰在る」

「何をては御在ません、高藤さん貴下は女の心を弄んで、自分勝手な事ばかりなすつて、夫て冷やかでないかと仰在いますか」

「然う激しちや不可ん、貴女のやうに前後の關係も考へずに、自分ばかり標準にしちやア、物事の筋道が亂れて了ふ」

「何が物事の筋道です、物の買賣をするやうに、人の心を弄んで、筋道も關係もありませんものか。私は……私は貴下に誑されて、姉妹の親情も失くして了ひました」

「併し僕は救しい點がないから、何と言はれても關はんが、未だに理解にならんやうだから、尙一度理解するやうに言ひませう。まア聞きなさい、貴女は勝手に破約するんだとばかり言はれるが、何度も言つた通り之は父の承諾がないからで、決して僕の

勝手ぢやない。僕の貴女を思ふ心は、以前と少しも變りがないから……」

「克く勝手な事ばかり……」と菊野子は喉を嚙んで叫んだ。「思つて下さると云ふなら、何故彼様な事をなさいました。桑山子見たいな人威かしの使人を寄越したり、何度手紙を進けても返番一度下さるぢやなし、加之、突如に出になつて、都合が悪いから廢せなんて、何と云ふ勝手な事てせう、夫ても冷やかでありませんか。思つて呉れる人が其様な事が出来ずか。いゝえ貴下は最初から、私を弄む心で在したのです」

「夫だから困る」と高藤は巻蓑を灰に差込んで、「菊野さん、まア落着いて考へて下さい。思つて居る居らんと云ふ事は、形に現せるものぢやないから、然うてないと言はれりや夫迄だが、僕の心中は、従來の所爲にも判明るだらうと思ふ。尤も西野をあげたのは悪かつた……夫は十分に謝罪するが、手紙を出さなかつたのには譯がある、と云ふのは、何卒父の心を宥めて、圓滿に結婚したいと思つて、色々と手を盡した、好い結果を得てから知らせやう、と考へて延引になつたので、決して捨て置いた譯ぢやない。いや斯う言や、又證據を見せろと言はれるか知れんが、僕の貴女を思ふ心は、何

れ程深いかと云ふ事は、憲太郎君の歸朝費一件でも理解してせう。實際僕は非常な苦心をして、一而識もない人に八百圓と云ふ大金を送つた、夫も所詮は貴女を愛するからせう。此一事だけでも、大抵お理解になるべき筈だが、貴女は何事も一圓に思詰めて、前後の關係を見ないから困る。僕こそ却つて貴女に怨言を言ひ度い程です。如何です、理解しましたか」

言終つて有爲顔に、又巻煙を煙らし始めると、菊野子は其顔を流し目に見て、華やかに笑ひ出した。

「何が可笑しいですか」と高藤は愕然とする。

「餘り都合の好い事を仰在るから」と菊野子は尙冷笑して、「兄の歸朝費を送つたのが、私を愛する證據だなんて、貴下其様な事言つて耻かしいとは思ひませぬか。然く彼の時の事を考へて御覽遊ばせ、貴下は「一の良士官を得て、國家に盡す誠心を現はす、お前の爲にするんぢやない、國家の爲にするのだつて、大層立派な事を仰在つたてせう。夫を今に至つて、私の爲にしたと仰在る……餘り未練ぢやありませんか」

強か急所を突かれて、流石の才物もグツと詰つた。これ隠しに煙草ばかり煙らして、心に波を立てて居る。菊野子は勝誇つた面色で、また語を續ける。

「然う勝手な事ばかり仰在るから、最初から弄ひ心算だつたらうと云ふのです。ねえ高藤さん、深く思つて下さるのなら、お母父が何と仰在つても、誰が何と非難しても、二人の満足を得るやうにして下さる筈ぢやありませんか。然うてせう、御自分の都合ばかり思はないで、些とは私の心中も考へて下さいな」

「然うするには地位を抛たなさやならん、加之、僕は遠からず戦地へ行くから……」

「出征する人が結婚されないつて道理はありません。私は何時までも待つて居ます、結婚さへして下さりや、一生待つても可いのですから」

「貴女は社會と云ふ事を考へんから困る」

高藤は心から嘆じた。彼は菊野子の疑ふやうに、弄ばうなど云ふ心は固よりなかつた。其美しい姿と、其聰明な性質とを見て取つて、深い愛慕の情を起したのであつた。國家の爲と揚言して、憲太郎に歸朝費を送つたのも、實は彼女を牽引ける爲で、何恩

怨のない章治を冷笑たのも、矢張彼女に自分の價值を見せ度い故であつた。斯くして老郡長を抱込んで、徐ろに菊野子の意中を聞き、遂に婚約まで結んだので、近々式を挙げやうと考へて居た。

處が意外な事から、彼は其愛情を捨てねばならぬ身となつた、と云ふのは、豫て高藤の才氣に惚込んで居た遞相の某子爵が、其愛嬢を呉れ度いと申込んで來た事である、權勢に後縁して榮達を求むるは、固より彼の主義ではない、が情實の釣練ある官海では、是に頼らねば直ちに大魚の群には入れぬ。高藤は其縁談に接して心が動いた。人は自分の腕のみで立たねばせぬ、波の立つのも風の方だ、空突く大浪を起すには、強い風がなければならぬ、自分は此風の力を得て、やがて海を躍す程の仕事をしやう、と思つたのである。

彼は女に溺れて功名を抛つ程、兩情に盲なるものでなかつた。それで、此上は父の力を藉りて、菊野子との約を絶たうと、事の始末を老父に告げた、父は一度其不所存を憤り、また其覺醒——父子には然ら思はれる——を悦んで、直ちに破約の委員を派

した。

惘れむべき菊野子は、斯くして捨てられる運命となつた。

「社會と云ふ事を考へなさい」と高藤は重ねて言つた、「僕は父の命命に反く事が出來ん。貴女との約束は無論守り度いが、約束を行へば家を出なさいやならん、地位も名譽も一擲して、市井の匹夫とならなさいやならん。随つて貴女にも苦勞をさせる、自分の天職と、國家に對する義務とを捨て、一時、情の満足を得た處で何になりませう。貴女猶く其點を考へて、今後の方向を定めて下さい、理解りませんか」

「理解りません、夫程冷静な考へがあつたなら、何故約束をなさいました。御自分の名譽ばかり大切で、人の名譽は何でも可いのですか。私は貴下の爲に名譽も何も……いゝ心を殺されて了ひました。私は今後如何なりや可いてせう。情の満足を得たばかりで、何になるかと仰在るけれど、女は夫より外に求めるものはありません」
「併し貴女と僕とは、元來思想が異なるのだから、何程饒舌つても果しが附かん。夫よりか、早く其言殘した事を聞かして貰ひませう」

「言残したつて云ふのは、貴下の不實を責める事です」
菊野子は斯う言つて、潸然と落涙した。

「ハ、ハ、些とも要領を得ない」

高藤は苦し氣に笑つた、途端に停車場で發車告知の鈴を振始めた。彼は喫驚して時計を見ると、慌てて手を打鳴らして、

「もう發車しますから失敬します」

菊野子は何とも答へぬ、高藤は早や立上つて、上衣の釦を掛けると、以前の女中が入口に膝を突く。

「おい茶代だ」

高藤は大きな銀貨を二つばかり、カランと音を立て茶盆に投じた。

「靴だ。早く靴を出して掛け、ちやア菊野さん失敬しますよ」

言捨て、急しく階を下りる、女中は周章と後に續く、菊野子は涙溢るゝ眼を擧げて、其後姿を視送つた。

上座 櫻子 醜体は 皆 こん 杯

ウツリ〜(泣)〜

(七)の三

夜は森々と更け渡つた。停車場前の安旅宿に、限りなき怨恨の涙を吞んで、不實男を視送つた菊野子は、今後如何なる意であらう？ 夫は暫く後に廻して、先づ河本家を見ねばならぬ。

章治は青蚊帳の波に包まれて、例の廣室に臥つて居る。微風呼ぶへく雨戸を開けて、端近う坐つたはち近と松野子で、傍には兎々と洋燈が點つて居る。松野子は病人の體を慰めやうと、戰爭雜誌を讀聞せるのであつた。

「僕の倒れたのは其處です、其鐵條網の傍です」と蚊帳の中で章治が叫んだ。

「まア然うでしたか、之では進めない筈ですねえ。ねえ小母様甚いものぢやありませんか」

「驚りましたね、ちやア夫は針金の垣見たいな物ですね」とお近は小首を捻る。

「然うてせう」と點頭いて松野子は蚊帳の中を覗いた、「弟の死んだ場所も、矢張其處

なんてすか」

「然うです。憲太郎君の所屬中隊は、我々の中隊と並んで進んだですが、何しろ一點の地物もない坂を、逆落しに打たれて突撃するのですから、夫やア實に慘烈なものでした。自分等の隊なんざ其鐵條網の傍まで進んだ時は、三分の一も残つて居なかつたです、もう一息で堡壘に斬込めると云ふ處に、其嚴重な鐵條網でせう、實に殘念だ、如何しやうか……と云つて些時立憫んだですな、其時不圖傍を見ると、思掛なく憲太郎君と顔を合せたんでせう」

「まア然うでしたか」と松野子は固くなつて「そ然うして如何しました」

「双方驚かましてね、やア……と一時に言つたです。君如何するかと聞くと、憲太郎君は思ひ切つて突撃する、見る僕の隊は三十人になつた、中隊長が戦死したから僕が代つて居るんだ。さア力を合せて突込め……と然う云ふんです、魔力と云ふものは素晴らしいもんで、ヒュー〜銃丸の來る處で、暢氣に其様な相談をしたんです。ハッハ、今考へると全然夢だ。夫では可し遺附ると云ふんで、無茶苦茶に踏破らうと

する、敵は例の機關砲と云ふ奴を向けて、無數の銃丸を雨降せる、残り少ない味方は碯々と倒れて仕舞ふのです。あゝ實に口惜しい、之しきの堡壘一つ、乗取れないとは何たる事かと涙を溢した。其時です、憲太郎君は無効だ、退却……と號令を掛けたやうでしたが、鳥渡見ると軍刀を持つて仰向けに倒れて、顔一面血だらけになつて居る、僕は夢中で其方へ駆けやうとすると、恐らしい音がして左の方……慥か左です、凄じく榴弾が破裂したと思ふと僕は碯と倒れた。所詮此様な風でしたが、後で聞けば憲太郎君は、前額に一ヶ處、眼の下に二ヶ處の貫通銃創を受けて、即死したと知れたのです。直ぐ目の前に見て居ながら、遺言を聞く事も出來んのは戦場の常で、實に慘憺たるものです」

語り終つて章治は、續けさまに太息吐いた、松野子は始めて聞いた弟が戦死の機。中佐の子に耻かしからぬ悲壯の最期を聞くに就けても、先立つものは涙ばかり、只過越方のみ偲ばれて、悲しい夢見る心地になる。お近も其心を思ひ遣つてか、密と眼を拭ふ氣勢であつた。

「さア此方へ……」と不意に六造の聲がした。ハッと振向く庭の間に、提灯一つ流るるやうに動いて、三個の人影が近づいて来る。

「嬢様、郡長様のお嬢様が来てな、何でも逢はなさやならねえから伴れて来たよ、執次ぐ間も待たれねえと言ふだ」

多代子は乃て火光の中に現はれた。後には護衛の體て無骨者の書生が隨いて居る。夫を見ると、松野子は彈かれるやうに立上つた。斯る深更に爾も執次ぐ間さへ待てぬと云ふ火急の來訪、何れ變事が出来たに相違ないと、早くも胸が跳るのて。

「如何したのです」と縁の端に立つて、「妹が如何かしたのですか」

「は……あの少し」と多代子は言溢つて、「濟みませんけれど、些時お顔を貸して下さいますせんか」

「嬢様、是穿くが可い」と六造は、機轉を利かして草履を直す。松野子を夫と突穿けて下立つた。頓て室内の目の達かぬ處に出ると、多代子は聲を密めて言つた。

「菊野子さんが、此家に在ぢやありませんか」

「はい、ど如何してとす」

「一度も被來らなかつたんですね」

「はア一度も。何故ですか」

「如何したんでせうね」と多代子は泣くやうな顔になつて、「之限り歸らなつて私の家を出たんですもの、私心配でなりませんわ」

「エッ、歸らなつて！」と松野子は思はず聲高めて、「如何云ふ譯です、夫許りでは判りません。さア詳しく聞かして下さい」

「如何な事があつたのか、私も熟くは知りませんが、三十分ばかり前に、湯浴見たいなものを置いて、何處へか出つたんですもの」

「エッ、か書置ですか」と松野子は聲震はせて、「而して何と書いてありました。多代子さん、もつと詳しく知らして下さい」

「永々世話になつたが、今夜限りお暇する……もうお目に掛れずさうして、只三三行書いてありました」

「如何したのでせう。今日は何か變つた事でもあつたんですか」

「はア高藤さんがお來になつて、大層混雜な話をしてたやうでした」

と冒頭して、多代子は自分の見聞を語る。夫に據ると、菊野子は高藤が酔し去つて程もなく、慌てゝ外に出て行つた。夫は十時近い時分であつたが、一時間程前に、悄然として歸つて來ると、暫く棚を鳴らしたり抽斗を開閉したり、何やら探し物をする體であつた、が乃て又外に出る氣勢であつた。深夜の事ではあり、半の機も怪しいので、郡長は菊野子の室に入つて見ると、突如目についたは遺書やらの紙片で、前に言つたやうな文句が書かれてあつた。夫から俄に騒ぎになつて、郡長は車夫と共に浦和道へ、多代子と書生は石原村へと手分けして、探しに出たと云ふのである。

「夫て行逢ふ人に聞きくして、此方へ探しに來たんですが、橋の袂の欄干が未だ寢ずに居ましたから、若し斯う云ふ人を見なかつたかと聞いて見ました。すると明瞭は判明らないが、今し方、橋を渡つた女があるッて然う云ふのです、ですから、的切り當家にお在だらうと思つて來ました」

「何と云ふ情ない人でせう」と松野子は涙聲になつて、「夫て何て御在ますか、衣服や何か持つて出やしませんか」

「いゝえ、夫も雜と調べて見ましたが、何も持たずに出たやうです。ですから父も若しか死ぬ氣ぢやなからうかつて、甚く心配して居ますの。ねえ相浦さん(書生の名)橋を渡つて此方に來たと言や、必と會はなきやならないんですがね」

「赤間川の方へでも行きやせんでせうか」

書生の語を聞くと、松野子は頭に水注がるゝ心地した。投死!と云ふ觀念が、チラと頭腦に閃めく、と胸は板のやうになつて、手も足も戰々と震へて來る。

「わ私、行つて見ます。多代子さん、何卒後から來て下さい」

(七)の四

松野子は後をも見ずに門外に出た。暗い村道に立出て、何處を目前に探す意か、お近や章治に告げもせず、一人出て見て如何する心か、松野子は夫を考へる暇がな

つた。死ぬ氣でないかと云ふ一語が有ゆる思慮を擾亂して、自分は今何處に居るのか、何處を如何様に歩いて居るのか、夫も心に留らぬので、噓へば一筋の繩に縛られて、何處ともなしに引かるゝ心地、只夢の如くに立出たのである。

門の前に踏出ると、彼女は直と立停つた。仰げば眞黒な梢の間に、六つ七つの星凌く晃めいて、行先は漆のやうな闇である。生垣の外行く小流は咽ぶが如き音を立て、折々吹さ来る夜の風が、ざわ／＼と梢を揺つて、悪魔が唸るのかと怪しまれる。

松野子の心の中には、深い悲哀と、強い恐怖とが交々起つた。妹の家出は結婚に關する事とは直ぐ知れる、何せ圓滿に治るまいとは、自分も豫て認めて居たが、夫が愈よ破れたので、失望の餘りに死意を決したものであらう……と折々辛而考へつけると、妹は既早淺猿しい死骸になつて、川に浮いて居るやうにも思はれる。

既う死んで了つたらうか、と松野子は心中で呟いた。すると何者か耳に口寄せて、いや未だ死なぬ、早く探しに行けと囁くやうな心地もする。松野子は又夢中になつた。と暗い村道も明瞭見えて、心は偏へに川岸へ飛ぶ。彼女は足を早めてメタ／＼と驅出

した。

て彼是一丁も走つたと頃頃、彼女は又立定んで、急しく四邊を視た。而して打鼓ふ聲を張つて、

「菊野さん、菊野さん」と呼んで見る。

だが何の答へも聞えなかつた。耳を澄せば何處かの森に鳥の鳴く音がして、稻葉の戦ぐ音さへも、ゾツと身に沁む感がある、松野子は譯もなく涙を零した。

「姉様！」

と不意に呼掛ける聲がした。松野子は惘然として飛退いた、と又極めて低く、

「姉様々々」と續けて呼ぶ。幻でもない、現でもない、正しく妹の聲である。

「然ら云ふ聲は……」と松野子は顫々と震へながら、

「私よ、姉様よく来て下さつてねえ」

悲しい聲と共に、姿が割然と目前に立つ。併し松野子は半信半疑である。

「如何して来たの？ 和女眞に菊野さん？」

「私今死掛けたの……」と直と寄り立つて、「だけでも急に廢したの。一目姉様に逢はなまや、如何しても死んで行けないから……」

「ぢや眞の菊野さんね。あゝ克く生きて呉れました。今ね、多代子さんから和女の居なくなつた事聞いて、夢中で駈出して來たのよ。和女、今何處へ行く積？」

「私？もう居處がなくなつて……」

「ぢやア兎に角、私の室へ被來い、此處ぢや何の話も出來ないから」

「あゝ何卒然うして」

菊野子は小兒のやうに點頭いた。て姉妹は並んで歩を移すと、河本家の門前に提灯が三つ四つ現はれた。菊野子は早くも認めて叫んだ。

「姉様、提灯が來ましたよ」

「あれは多代子さんが探しに來るのです」

「夫ては早く。私彼の人に逢度くないから、別の路へ入つて下さい、逢はないやうにして、さア姉様早く」

「ぢや畑の中へ」

と松野子は妹の手を執つた。何の畑か判らぬけれど、姉妹は兎に角走り入つた。踏む足さへも定かならず、只夢に道行く心地して、河本家さして急ぐのだ。

提灯は前になり後になり、左の村道を走つて行く。

(七)の五

露深い畑中を、爪先探りに進んだ姉妹は、裾も袂も溷然に濡らして、辛と河本の門前に出た。振向き見れば、提灯の火は豆のやうに小さくなつて、川岸の方向に動いて行く。

「さア菊野さん、足許に心を注いで……澤山鋪石がありますから、履かないやうにして……」

斯う言つて門を潜つたが、松野子は言はうやうなき辛さを感した。會て章治を辱かしめ、慈悲深いお近を冷笑して、不信不徳の女となつた妹を、許しもないに引入れる

……近は何と云ふてあらう？ 章治が聞かば何と思はう？ と考へ初めると耻かしいやら怖ろしいやらで、彼女は其儘消えも入り度い心地する。併し菊野子は格別心に留める様子もなかつた。逡巡ふやうな風もなく、歩調も案外確乎して、導く儘に跟いて来る。

松野子は既早躊躇する事が出来なくなつた。既う已むを得ぬ、兎に角密と室に入れて、後で詫ひる事にしやう、と突嗟の間に思案を定めて、庭木の間を傳はつて、二階の上り口へと導いた、て耳に口寄せて。

「私今雨戸を開けますからね、此處に待つて下さいよ。ね音のしないやうにして、密と入るんですよ」

「まゝ」と菊野子は幽かに答へた。

松野子は尙も念を入れて、以前の病室へ歩を向けた。怖る／＼縁側の下に立つて見ると、お近は洋燈の傍に悄然坐つて、考へ事でもする體である。松野子は胸の騒ぎをジツと押へて、

「小母様只今……」と震へながら言つた。

「まア……」と眼を睨つて、「如何したんです、菊野さんが見えなくなつたつて眞實ですか」

「は……ですけれども」と松野子は縁側を上つて、「何卒御心配下さいますな。もう何てもないのですから」

「ぢや發見つたんですね、然うですか」とお近は都合踏して、「今ね、多代子さんも行きまましたし、六造も貴女の事を心配して、探しに行つたんですがね、貴女達はなかつたの」

「はア、多分道が違つたんでせう」

「おや／＼、夫は困つた事……ぢや亦吉でも起して、六造を迎へに遣らなさらなせせん。貴女が一人で行つたと云ふもんですから、私如何に心配したか知れませんよ」

「小母様、濟ない事をしました、何卒堪忍して下さいな」

「濟むも濟ないもありませんが、若し過失でもあつちや困ると思ひましてね……ぢや

私は亦を起して遣りますから、貴女些時雨戸を締めて下さるね」
 お近は獨で喋舌つて、周章と勝手の方に行く。松野子は其後影を心で拜んで、夫から立直つて静に雨戸を締め、密と蚊帳の中を覗いて見ると、章治はすやくと眠つて居る。

松野子は折廻しの縁側に出て、徐々と雨戸を締つた。而して暗を透して覗くやうに、「菊野さん早く被來い」

菊野子は黙つて入る、と姉は又戸を締めて密と二階に入れた。手探りに構寸を擦つて、細く火光を點けて見ると、お召の單物着た妹は、腹から下がぐぶ濡れになつて、顔は紅く眉が吊上つて、眼は狂者のやうに輝いて居る。

「菊野さん確乎しなきや不可せんよ」と彼女は姉と妹の手を執つた。菊野子は崩るやうに坐つて、其怪しく光る眼に涙みを見せて、

「姉様堪忍して下さい。私、氣が違ふやうだから——済みませんのねえ」

「如何したのですよ。まア此手の熱い事」と尚妹の手を握つた儘で、「和女大層熱があ

りますよ。加之、變な事ばかり言つて……確乎して下さい。氣が違ふなんて、其様な詰らない事言ふものぢやありません」

「だつて氣も違ふだらうぢやありませんか。私高藤さんに捨てられて仕舞ひました。世の中に頼りが失くなつて了つたんです」

「夫ぢや愈よ破談になつて？」

松野子は嘆息した。夫は十分豫知して居たけれど、扱愈よ悲運が廻り來て、今宵の事態を生じたかと思へば、流石に哀れにも又怖ろしく感じられる。

「だけれどもね菊野さん」と彼女は良久あつて語を續けて、「何せ頼らないものなら、怒つても怨んでも爲方がないから、奇麗に諦めて了ひなさい。私、能る限り力になるから心を大なく有つて頂戴。ね菊野さん、決して心配するんぢやありませんよ」

「だつて口惜しいぢやありませんか」と菊野子は語調を上吊らせて、「散々巧い事を言つて、お終に捨て了ふなんて、餘りだわ……餘り酷いわ。兄様が存命で居て呉れりや、私、敵を討つて貰ふんだけれど……あゝ口惜しいッ」

「まア静になさい、高い聲しちや不可せんとよ」と松野子は俯くする、が妹は心に留める風もなく、

「姉様、私口惜しいんですよ」と潜然と涙を流して、「自分の都合で破談にして、今更にお互ひの思想が合はないなんて言ふんですもの、素から私を誑かす意でしたわ。だけでも理窟を言つても勝てないから、私、死んで怨む心になつたの」

「まア飛んでもない事を……」

「惜いのは高藤さんばかりぢやありません。あの郡長も娘も惜いわ。自分の都合の好い時ばかりチャホヤして、利益がなくなりや冷遇するんですもの、彼様な卑しい人間はありやしないわ。だから死んで耻辱を掻かせて遣らうと思つて、私、赤間川に陥つたのよ」

「まア危い事を」と只太息吐く。

「夫て高澤橋から水車場の方へ行つて、眞暗な水の中へ入つたけれど、其處は風の邊までしかなかつたんでせう……夫て身が冷たくなると、何だか死ぬのが可厭になつて、

急に姉様に逢ひ度くなつてよ。だから又岸へ上つて、此家へ来る途中で、彼様して姉様に逢つたのです。私ね姉様、姉上にも扶けて貰つて、彼の人達に復讐したいと思ませすから、何卒智慧を借して下さいな」

「菊野さん、其様な心を起すものぢやありません。復讐なんぞしなくても可いから、従來の事は全然と忘れて、姉妹で間柄善く暮しませう。ね然うして下さり、滌美の血の繼るものは、和女と私ばかりになつたんだから」

「S、え復讐します。高藤さんは私を捨て、他の女と結婚するに相違ないから、私は何處までも邪魔します」

聲は最と甲走つて、顔は倍す赤くなつて、熱病患者の囁言さふやうな態となつた。

「菊野さん何卒心を落着けて下さい」

松野子は膝頭を突附けて、哀を乞ふやうに言つた時、階段の下で、

「松野さん、些時来て下さいな」とお近が呼ぶ。

「は……」と口の中で答へたが、當惑の色が面に浮んだ。

(七)の六

「近は最早知つたらうか……と斯う思ふと、松野子は何か大きな罪でも犯したやうで、妙に怖ろしい威がする、心ばかり徒らに逸つて、腋下には冷汗が汗く。」

「松野さん」とお近は又叫んで、ミシリと階段を踏む音がした。「些時で可いんですから何卒」

「はい只今……」

松野子は怖ろし氣に立上つた。何かなしに妹に胸を叩きつけて、足早に階段の下り口に出る、とお近は早くも縁側に下りて、章治が病室の方へ行く。

「小母様、御用ですか」

階段を下つた松野子は後から問掛ける、とお近は其儘振向いて、

「別に用事はありませんけれど、菊野さんは如何したのです」

松野子は答ふる處を知らなかつた。呼吸を急しくして、頭を俯れるのみである。

「松野さん、何も遠慮する事はありませんよ。大事の場合ですから、極悪いなんて思つちや不可せせん。貴女の爲には只一人の同胞ですもの、良くして遣るのは當然の事です。私等になら何卒遠慮せずに、十分にしてお遣りが可御座んすよ」

「有難う御座います」

松野子は思はず涙を浮べた、苦い顔を見るよりは、情の語を聞くのが辛い……彼女は隠し立した所爲が耻かしいのと、慈悲あるお近の心が忝ないのと……詫びと感謝を一時に、心の中で手を合せる。

「只ね、夫丈け言つて置かうと思つて……」とお近は莞爾して「ぢや行つてお話しなさい、床は貴女が可いやうにして、悠り休んで下さいよ」

「はア……だけでも章治さんの方は？」

「熱く眠つてますから、心配するに及びません。若し又大熱でも出たら、貴女に起きさせますから……」

「済みませんねえ、堪忍して下さい」

と松野子は又二階へ登りて行つた。お近の語に心が引立つて、欣々と入つて見ると、菊野子は額に兩手を當てし、ジツと俯伏して居るのであつた。

「苦しいの菊野さん。まア起きて頂戴。大府都合が好いんだから。」

「姉様、此室でしたねえ」と菊野子は苦しうに顔を擡げて、自分の言度い事を言つて、「此室でしたねえ、初めて此地に來た時、祖母様と三人で泊つた室は？」

「え、然うなの、此室に寝たの。」

と松野子も釣込まれて、夢の如く室内を視廻した。姉妹の目には、當時の幻影が浮ぶのであらう。

「變つたわねえ」と姉は先づ嘆息した。

「眞に詰らなくなつてよ」と妹も調子を合せたが、忽ち又俯伏しになる。「あ、苦しい、頭が割れるやうで……眼が昏くなつて……あ、苦しい。」

「何處が苦しいの？え菊野さん」

「頭が……。あ、苦しい」と身悶えする。

(七)の七

「困るわねえ。今藥を進げますから、靜然として居て頂戴。水を持つて來ますから、鳥渡待つてね。」

周章て、立つて階段を下りた、が彼女は縁側に出ると足音密めた、家族何れも章治の看護に疲るゝ場合、之が爲に騒がせては、濟ない事だと考へたので。

松野子は盗むやうに水を汲んで、怖るゝ縁側を辿つた、家族は憐みのない心寛かに、何れもグツスリ寝込んで了つて、勝手の方に鼠の驅ける音がする。

乃て二階に登つた彼女は、水注器と金盥を入口に掛いて、小机の抽斗から、解熱藥を取出した。而して洋盃に水を注いで、密と妹の頭に手をかける。

「カ、藥……是をお服藥なさい。」

菊野子は頭を擡げて、與へらるゝ藥を呑み終へたが、其儘凄然と横臥になる。觸つて見ると、額は火のやうに熱して、眼は物見る力もないやうである。

「然うして臥ちや不可ませんよ。今、床を敷いて進めますから、寝衣を着てお就寝なさい、濡れた物を着て居ちや身に毒ですよ」

斯う云つて働るが、菊野子は一言の答へもせぬ。姉は只オロ／＼して、先づ蒲團を被け枕をさせたが、菊野子は身動きさへもせぬのである。

て、爲様事なしに其儘にして、姉は頭を冷して遣る。菊野子は殆んど昏睡の體、數ば乾く唇を舐めながら、何やら口の中で呟くのである。

油が少くなつたのか、洋燈の火が華々と鳴つて燃え、火屋が濼乎と燻つた。庭の外行く小流が、淋しく悲しい音立て、時々ざわ／＼と木の枝が鳴る、呼吸を殺して介抱する松野子は、何か魔性のものあつて、此夜を咀ふ如き心地がした。

「姉様！」と菊野子は突然に呼んだ。

「ま……」と言つたが妹は答へる風もない。姉は氣遣しげに顔を覗いて、「何？菊野さん、甚く苦しいの？え如何したの？」

「ぢやア眞實ですわ」と菊野子は明瞭した聲で、「來月になりや式をするんですね。嬉

しい事……早く大臣になつて下さい。然すりや私は大臣の夫人……必と立派にして見せますわ。え、私もつと勉強します。佛蘭西語でも伊太利語でも、立派に話せるやうにね、繪なんか廢めても可いのよ」

思ひは樂しかりし戀語り、彼女は過ぎし日の幻を、今の現に見るのである。

「あゝ氣の毒ねえ」と松野子は嘆息した。

「嘘です〜」と噎言は又續いた、「貴下の言ふ事は皆虚構です。薄情な人……私を誑して居たのです。お金返しますわ……御自分の都合ばかりで、私の事は思はないもの。私、姉様に義絶したし、兄様は死んで了ふし、あ……姉様敵を討つて下さい。」

一まきり烈しく叫ぶと、忽ち嫣然と打笑んだ。松野子は梅を執つて、亂れた妹の髪を撫で、居たが、其微笑む顔を見ると、

「可哀相にねえ」と呟いて、唇りと涙を落した。

此噎言は拂曉近くまで續いたのである。松野子は頭を撫るやら、額を冷すやら、呼

吸も吐かず介抱した。而も心は越方行末に彷徨うて、辛い悲しい思ひばかり、秩序もなく起るのであつたが、何時しか妹の肩に額をつけて、うとくとなつて了つた。

(八)の一

看護婦にてもならう……と決心した松野子は、自然に看護婦になつて了つた。熱を病む妹の介抱と、章治が傷所の手當とを引受けて、一週間はかりは殆んど寢食を忘れて働いた。其熱誠と忠實とを見た醫師は、薬よりも手術よりも、是が病氣を癒すのだと賞揚した。

幸ひにして、先づ妹が床を放れた、が其一週間は、松野子に取つて最も辛い試験であつた。忘恩不信の身でありながら、深く耻らふ色ない妹の様子、夫を見らるゝ辛さは勿論であるが、何時ぞや物の本で讀んだ「怨ある人に善を爲せ」と云ふ教が、身近の手で實行されるを見るのが、何より辛いのであつた。

身近は目の廻る程忙しい中で、様々の事をして呉れた。序てなればと醫師にもおせえて呉れ、やれ果實の滋養物のと、痒い處に手の届くやうにして呉れるが、妹の過去に就いては、一言も口にしないので、松野子は只泣いて感謝するの外なかつた。

さて、菊野子は臥床を放れたけれど、以前のやうに輝かしい、強く美しい面相は、再び見られぬかと思ふ程、太く衰れたのである。彼の誇りを有つて輝いた眼は、物怖する如く急しく動き、滑らかに動いた唇は、縫はれたやうに引結んで、折々堪へ難さうに吻と息吐く。何事を考へるのか、絶えず窓外を眺めては、小首を傾げて居るのである。

外に一つ、松野子の心を悩ませた事があつた。夫は六造爺の話であるが、彼の語る處を聞くと、菊野子が此家に病んで居る事が、既に村中に知れ渡つたので、人は菊野子が高藤との婚約破れた處から、今度は溫和しい姉を押退けて、章治と關係をつける爲に、厚面皮しくも押掛けた……と評して居るとやら。

松野子は此風評を聞いて、針も刺さるゝやうな感がした。辛い！悲しい！耻かしい！夫は幾度繰返しても同じである、が只嘆じてばかり居られはせぬ。何事を差指しても、早く世間の誤解を避けねばならぬ。夫には妹を去らせるの外ないが、狂人のやうな今の彼女を、如何して手放して遣れるだらう。假令又、出して遣られるものとし

ても、何處を的に如何暮させやう見込はない。已むなくんば自分も共に、此家を出るより途がない、けれども年來の交誼と親交を捨て、重傷の人を見捨て、去る事は、逆も爲し得る事でない……松野子は斯う考へて、只氣を揉んで居るばかりである。

一週間は斯くして過ぎたが、忠實な醫師の治療と、熱心な松野子が看護の功とで、章治は少しづつ歩けるやうになつた。左手は痲疾になつて了ふが、足は満足に癒るであらう。時々、縁側に立出では、庭木の間から田圃を眺めて、よく助つた……と嘆くのが例であつた。

既早麥刈の節なので、農家は今、目を廻す程の忙しである。健な六造以下
の雇人を督して今日から畑に出初めた。留守は松野子が預つて、醫師の應接場所の手當、何呉となく扱ふのである。

「やア有難う、お庇蔭で好い心地になりました」

今し、松野子の手當を受けた章治は、新らしく纏帯せる足をソツと伸して、蒲團の上
上に仰向になつた。

「時に何てすな、憲太郎君の叙勳ですが、僕は功五級は些と低かアないかと思ふてすね。勿論標準のある物ぢやないから、五級でも不足は言へんが、憲太郎君の最期は實に悲壯なもので、實際全軍の士氣を鼓舞したのですから、當局者も格式なんか拘まないて、破格の行賞をせにやならんものです。併し夫はまア爲方がないが、何てすか、金は既う下りたんですか」

「はア昨日役場から……」と言つて、松野子は何やら考へ込んだ。

(八)の二

戦死當日中尉に任ぜられた憲太郎は、其抜群の戦功に依つて、叙勳賜金の御沙汰があつた。功五級金鷲勳章、年金三百圓は死者に對する手向の印、遺族者たる松野子には、千餘圓の一時賜金と、同じく遺族扶助料とが下りた。彼女は故中佐分の扶助料と此度の賜金とで、先づ一生を過される物を得た。

併し松野子は此恩典に接して、俄に不幸になつたやうな感がした。人は死者の光榮

を賞へ、又、松野子の名譽として羨んだが、彼女は只情なく思つたのである。夫は、河本家を去るべき時節が、此恩典と共に來たからである。

松野子は暫く打案して居たが、乃て嘆ずるやうに、

「私、近々暇をしたいと思います……」

「お暇を？」と章治は頭を捻つて、ジツと松野子の横顔を視た。「當家を出て行くといふのですか」

「はア、貴下も段々お癒りなさるし、加之……」

「何處へ行くといふのです」と章治は語半ばに叫んだ。「東京へですか。いや行先よりか先づ其理山を聞きませう、何故當家を出られるのです」

「だつて何時までも御厄介になつて居られませんか」と膝頭を親詰めて、「彼様してお金を戴いて、私と妹丈けなら、如何にか暮して行けるやうになりましたから、姉妹で家を借りて、辛抱しやうと決心しました。永らくお世話になつて、御恩も報さずに出るのは、誠に濟ない事ですけれど、其中、如何かして御報恩を致します」

「夫は宜くない。尤も此様な詰らん土地ですから、可厭に思ふのは無理がないです。けれども田舎丈けに暢氣に暮されるのですが、東京なんかぢや、容易な事て生活が出来ませんよ、と云つて東京に出られる意か如何か知らんが、女の腕で生活すると云ふは、先づ望むべくして行はれないと云つても可い、だから何卒遠慮せずに、悠り當家に居つて下さい。勿論僕も有餘る身分ぢやないが、耕して穫れば食ふに不足はありませんから、お姉妹を置く位は何でもなすです。一時賜金や扶助料は銀行にても預けて、何程でも殖して、將來の役に立てるが可いてせう。ねえ松野さん然うなさい。然うした方が利益ですよ」

「有難う御在ます。ですけれど、妹は彼云ふ我儘な性質ですから……」

「可いぢやありませんか」と章治は最ど熱心になつて、「我儘な丈けに又面白味もあるんです。加之何程か衰弱して居られるさうだし、兎に角悠りなすつて、徐ろに考へるが可いてせう」

「夫は然うですけれど、妹が居るまいと思ひますの。少し身が快くなれば、必と外へ

行くに違ひありません。若しか然うなつた時は、私は何時でも追跡て行かなさやなりませんか」

「然うでせうか。併し何程我儘でも、義理と云ふものは知つて居てせう、一命を捨つたのは誰のお庇蔭か……と云ふ事を考へて見たら、貴女を差措いて、自分勝手になれるものぢやありませんまい。然うです、必としやせんですよ」

章治は辯護するやうな口調である、松野子は夫を聞くと、急に動悸が高くなる、がジツと心を押鎮めて、

「夫ぢや貴下、頃日の事を御存知ですか」

「知つて居ます。投身を企てた原因でせう、え、大抵承知して居ます」

斯う云つた章治の呼吸は、著しく荒くなつた、て逸る感情を鎮めるのか、當時眼を瞑つて居たが、

「投身しやうとした原因は、高藤との結婚一件ださうで」と然り氣ない語調になつて「とすると高藤に欺かれて失望の餘り死なうとしたのでせう」と云つて僕は勿論詳し

い事も知らなげりや、又聞き度いとも思やせんてす、けれども事情は大抵想像する事が出来る、折角思込んだ者が、……いや愛し合つた意のものに、不意に反かれた心の中は、何れ程苦しいかと云ふ事は、大抵知る事が出来るてす」

「然うですなえ」と言つた限り、松野子は二の句を繼げなかつた。嗚呼、愛人に反かれた心の中！其苦しさを推測るとは何たる悲しい聲であらう。其語を聞く松野子は、身を縛られたやうに思つたのである。

「廢しませう、ハッハ、」と章治は己れを嘲けるやうに笑つた。「いや詰らん事を言ひました、此様な事を言つちや、却つて貴女を辱かしめるやうなものだ。松野さん、悪い事を言ひました、許して下さい」

「怒すも怒さないも……真個其通うてすもの」

「併し何てすなア、貴女達の激しい變化を思ふと、昨年の御移轉當時の事が、目に見えるやうでならんてすね。僕は彼時の事は能く覚えて居る。當家にも着るになつた頃は、此庭の菊が満開でしたらう、僕は菊の花を寓居へ持つて行つて、此花は貴女の

爲に咲くんだ、と然う云つた事があつたてすね」

「然うでしたなえ」と恍然する。

章治も夢見る如く、

「處が其後の變化は如何てせう、宛然夢のやうぢやありませんか」

「真に夢のやうてすね」

「何の事はない、丁度菊の花が茨になつて、刺が生えたやうなものです。花のやうに幸福にと思つた貴女は、言ふに言はれない不幸に遭ふ……幸福の代りに死と云ふものが来た、病氣と云ふ奴が襲うて来た。夫を思ふと實に氣の毒でならんてす」

「有難う……私達に運がないのですから、疾に諦めて居ますけれども、貴下こそ氣の毒てすわ。左の御手は、逆も癒らないと云ふんですもの」

「是てすか」と章治は胸に乗せた左手の、思々しく縋せるを凝と視て、「何有、一本位利かなくなつて何でもないんでさ。戰死した人の事を思や、両手が癒つても幸福と云ふものです。併し又、何程か怒があるから、尙一度隊に歸つて、何か役に立たなさや

ならん、夫も叶はん事なら、平和克復の日に、切めて凱旋行軍の列に丈けなと入り度いなんて、始終其様な事を考へて居るんてす」

「御有理で御在ます」

「餘り有理でもないですが、所詮功名心と云ふものでせう。自分が爲にやならん丈けの事をして、夫て不具癡疾となつたのだから、甘んじて居なきやならんてす。然うてすとも！行軍の列に加はつて何の役に立つてすか、詰らなう」

松野子は答へに窮して居る、と章治は語調を緩へて、

「併し松野さん、先刻の事は僕の忠告を容れて下さい。貴女に行かれちや、第一母が非常に失望します」

「はア、尙熟く考へて見ませう」

「考へるに當らんでせう」

章治は突込むやうに言つたが確と句を遮つた、が斜めに縁側を眺めた眼が、異様に光るのであつた。松野子は何氣なく振向くと、長い袂がチラと見えて、次いで階段を

上る足音がした。

松野子の顔には色が動いた。

「私鳥渡失禮します」

章治は答へもせずには點頭くと、松野子は周章しげに立上る。

(八)の三

松野子は激した故を知らなかつた。偷聽する妹の姿、夫を瞥見した章治の顔に無言の意味ある色を見ると、赫とばかり逆上して、何の思慮なく立つたのである。怪しき胸騒ぎを感じて階段を上ると、菊野子は欄干に凭れて、遠くの森を眺めて居た。松野子は其後姿を凝と見ながら、

「菊野さん、何見て居るの？」と寄立つた。

「あゝ姉様」振向いて愕然して、力なく坐ると、「餘り好い景色だから見惚れて居たの。何か用事？」

「え、相談する事があつて」

「如何な相談？」と眼を据ふる。

「他の事ぢやないけれど……ほら昨日も鳥渡言つたてせう、近々中に當家を出なすやならないつて事」

菊野子は黙つて頷首いた。姉は語を續けて、

「一時賜金も戴いたし、辛抱さへすりや暮して行けるから、早く然うしたいと思ふのよ。何時までも人の厄介になつて居られないから……」

「ぢやア如何する考へなの？」

「未だ如何と云ふ考へもないけれど、何れ家を借りて、姉妹で何かする意だから、兎に角早く出た方が可いのよ」

「何かするつて如何な？生活の爲になる事なんか、私、逆も出来ないから」

「其様な事言つて居られますか」と松野子は窘めた。「何時までも其様な心ぢや困りますよ。何程可厭でも、お互ひの身の定るまで、姉妹で暮さなすやならないから、和女

も生れ代つた心になつて、何かして呉れなすや困りますわ」

「身の定まるまでッて」と口の中で繰返して、「夫ぢや姉様、動かなくても可いつてせう。

然うだわ、靜然として居る方が可いのよ」

「何故？」と眼を据ふる、と妹は冷笑するやうな面色で、

「何故つて、姉様の身は既に定つて居るから。姉上が居なくなつたら、當家の小母様が泣きますよ。章治さんだつて泣くわ」

「可笑な菊野さん」

松野子の聲は震へて、顔が焔と紅らんだ。

「何も可笑な事はないわ。誰も姉様を信用して居るから、姉上は當家に居る方が可いつてせう。私見たいな者と同接になつて、要らない苦勞しなくても可いのよ」

「菊野さん、夫ぢや餘りと言ふものですよ。誰が要めて苦勞したいものですか。如何かなるなら、餘り動かない方が可いんだけれど、世の中の義理と云ふものは、勝手に反かれないものですからね。設令ば私丈け居られるにしろ、和女一人出して遣られる

ものですか。夫もね、和女が普通の人ならだけど、和女は氣が短くて飛んでもない事ばかりするんですもの、……一刻だつて放しちや置かれなんでしょう。將來、又如何な事で甚く失望しないとも限りませんし、然う云ふ場合に逢つたら何をするか、如何な短氣な行爲をするか、和女自身でも豫知らないてせう。ですから私は、確乎と身が定まるまで、同棲に居なさいやならないと云ふのですわ」

「然うですとも？ 私には短氣で馬鹿だから何でもするのよ。だけれど私は、出て行けと言はれるまで當家に居ます、而して彼の郡長に復讐します。氣の毒だけでも爲方がな……」

前庭の梢を掠む夕日の光線は、彼女が誇りを有つた面を輝かした。松野子は思はず一膝進めたが、息を吞んで黙つて了つた。

(九)の一

時日は苦しい夢と過ぎて、七月も残り少なくなつた。月初めには摩天嶺の激戦があつて、程なく蓋平城の占領となり、勇敢の開き高き敵將ケルレルが、月の中旬に摩天嶺に逆襲して、悲壯極る戦死を遂げた。下旬に入つては細河沿一帯の地に我兵力が展びて、大石橋附近にも大きな戦闘があつた。而して其兵力が更に左に延びて、營口邊盤嶺も我が有となる。海軍の活動が、久時噂に上らぬ間に、陸軍の火花は、目眩しい程に散つて來た。歩行の自由になつた章治は、其戦報の到る毎に、戦地の方の空眺めては、疲れた腕を撫るのである。

歴史に大きな事件を遺した其月日は、河本の家庭にも多くの變化を興へて過ぎた。出て行かうと云ふ松野子の決心は、放縱我慢な妹に妨げられて、未だ其儘になつて居るが、菊野子は漸次に家族と親んで來た。談話は勿論、食事も俱にするやうになつて、朝夕、庭や田圃を徜徉しては、節面白く唱歌を唄ふ、例の水彩畫のスケッチも作る、

何れも大切にして呉れるが、松野子は其有様を見るに就け、倍す不安に念ふのである。

書籍も讀めば聲高に笑ひもする。熱病當時の陰鬱な、険しい色が面を去つて、以前の如き快活——寧ろお轉變らしい動作と、華かに美しい色が來た。お近始め家族一同、いや不安に思ふのみでない、章治と妹が久瀨で會ふた友のやうに、悦ばしやうに語り合ふのを見て、何となく腹が立つのであつた。

燒き附くやうな盛夏の日が、今し方、遠くの森の傾くと、野面の草木が、蘇生の息を吐くやうな香氣の高い微風が、冷々と吹いて來る。

章治は端近う片足伸して、暮色の被る庭を眺めて居るが、鶏頭花や鳳仙花の咲く華壇、青芝軟かに着る築山、夫を越して見える田圃や畑と、其方此方に彷徨ふ彼の眼は、折々吸寄せらるゝやうに左に向いて、斜に仰ぐ二階の欄干に、何物か求むる色があつた。

と忽ち二階の一室に、細く甲の高い、透通るやうな音で、唱歌の低唱が始まつた。唱歌の文句は聞取られぬが、聲は正しく菊野子である。章治は眼を輝かして耳澄した。

唱歌は段々低くなつて、其哀調の微音のみが、胸の底にまで込み込むやうに、得も言はれぬ悲しさを傳へて來る。

「旦那、何に浮れてるだね」
大きな聲が耳許に響いて、ガラリと物を投げる音がした。章治は狼狽へて振向くと、庭掃除に來た六造が、竹箒を地に投じて、撒水の用意をして居るのである。

「涼しくなつたな」と章治は附かぬ事を言ふ。
「涼しくなりましたよ。だがの旦那、二階に心を奪られちゃありませんねぞ。唱歌は耳の毒で、姿は目の毒だて。アハッハ、」

笑ひながら如露を振つて、焼けた地盤に練絲見るやうな水を注ぐ。
「詰らん事を言ふな」と章治は苦笑した。

「いや詰らぬ事を言やねえ」と縁側の下に寄つて、「俺ア頃日から然う思つて居たが、また彼の転婆に心を奪られたね。旦那夫や善くねえだぞ、松野樹の親切を思つたら、其様な不義理な事は出来ぬぞ」

「ハッハ、何を言ふか」

「誤魔化しなさんなよ。俺アも前様の様子で、何も彼も判明つてゐるだ。旦那、俺ア拜むから、其様な心有たねえやうにな……彼の恩不知の懶惰者の我儘者が、何の役に立つべえ。心を奪られるなら、松野様のやうな人に奪られるが可いだ。是や旦那の爲を思つて言ふのだから、腹ア立てずに聞いて下せえ」

思ひ込んで言つて、又如露を手にした時、不意に後に聲がして、

「お仕度が出来ましたから、召食つて下さい」

章治は愕然として振向く、と何時の間に来たのか、傍に松野子が突膝して居る。

「然うですか、ぢや食べませうか」

章治は怖氣に立上ると、六造は何やら松野子に眼配せする。

(九)の二

繼て一同食卓に就いた。章治は近と對向ひに坐つて、松野子は妹と向合つた。今

日の午後、大石橋及び管口の占領勝報が達したので、章治は心ばかりの祝ひをしやうと、平素に變つて晚餐を調へて貰つた、鮮魚の炒い土地の事とて多くは野菜料理であるが、松野子が心を籠めた調理は、舌鼓打つに足るのであつた。

座が定まると、章治は先づ洋盃を執つた。

「戦地に在る友人の爲に……いや我が軍隊の爲め、遙に健康を祈りませう、何卒を酌を……」

「私注ぎませう」

と菊野子は逸早く葡萄酒の瓶を執つて、満々と酌をする、章治は甘さうに一口飲んで、洋盃を措くと莞爾して、

「さア何卒お姉妹も……お母様も一盞飲んで下さう」

「私は然う云ふ酒は飲めないから、普通のにしませう。だがね章治や、何程葡萄酒でも、澤山飲んで悪からうから、氣を注げて呉れよ」とお近は氣遣はしさう。

「大丈夫です」と又一口吸つて、「飲めと言はれても飲まれアせんてす。満洲に居る暇

友は、泥水さへ碌に飲めない、沙の交つた物を食つて、焼野原に轉寢をする……其苦痛を思ひ遣ると、祝盃を舉げるのも勿體ない程です」

「如何に苦しいてせうね」と菊野子は語を挟んだ。「戦地の苦しい話は、度々父から聞きました、北清事變の時も、矢張今のやうな暑熱で、大層苦しんだんですつてね」

「然うでしたらう、一體支那は何處も水が不足で困るです」

「怖ろしい話つて云へば……」と菊野子は姉の顔を見て「ねえ姉様、祖母様もよく戦争の談をしましたつけ。戊辰の戦争を見たつて話。色々な怖い事見たつて、よく聞かして呉れましたつけね」

「然うでしたねえ」と松野子は始めて口を開いた。「既う少し存命で居たら……」

「然うですわ」と菊野子は姉の語尾を奪つた。「真に尙少し存命で居れば、色々變つた事が見られたのに……」

語尾を消して、夢のやうに恍然と外を見る、哀れな祖母の死を思ふと、流石に己れの罪怖ろしく感ずるのだらう。祖母は實に、彼女が仕方一つで死んだ。言語に絶えた

我儘な所爲が、祖母を驚死せしめたのである。松野子は夫を想起して、今更、怒し難いやうな念をした。

「眞個仰在る通りです」とお近も沈んだ語調で「けれども然う云ふ事は、大抵後で氣が注ぐものですからね。真に不幸福な方でしたよ。碌々楽しいと思つた事もなく、苦しい生活のし通爲て、而してお姉妹の顔も見ないで死なさる……何と云ふ不幸福な人でしたらうね」

「夫も之も、私達に運がないからです」

松野子は吻と息吐いた。妹は目を舉げて、お近と姉とを等分に視たが、其儘黙然と差控える。

一同面白からぬ色をして、密と箸を揃いて仕舞つた。座席は蒸よりも早く冷めて、話の機軸も折れ果てる。

「や、早く食ませう」と暫時してから章治が言つた。「如何です松野さん葡萄酒と一盞……菊野さん貴女飲んでせう」

「は、有難う」と姉妹は同時に答へたが、松野子は、章治の語道ひが、妹に厚いやうに思はれてならぬ。

「ぢや一盞藏させう」と菊野子は手酌で注いで、さも甘さうに飲干した。

「勿々見事です」と章治は微笑んだ。

食事は斯くして過ぎたのである。「祝」と云ふ意味は、何處に現はれたと云ふ事もなく、一同言寡々に箸を措いた。

乃て飯焚女が食器を下げに来る、と松野子は唯一人、草履を突穿けて裏口へ出た。

(九)の三

立繁つた庭木の間を抜け、低い柴折戸を抜けば裏田圃である。松野子は追駈けられるものやう、周章しく戸を排して、人影のない畦道に出た。

日は全く入り果て、暗縁に蜿る隣村の森の上に、微かな反照を受ける雲が、一片ふうわりと浮んで居る。森を透し林を抜けて来る風は、稻の葉擦の爽かな音と、香ば

しい其匂ひと、小流の音と、蛙の唄とを誘うて、習々と鬘を撫で、行く。松野子は眼を落して、夢の如くに辿つた居たが、唯ある土橋の上に来ると、足に釘でも打たれたやうに、直と立停つて水面を視た、細い流れは、名も知れぬ水際の雑草を頷かして、呟くやうな音立て、慌て、逃げるかと流れるのである。其を凝と視る松野子は、狭い胸を襲ふた恐怖と絶望とが消えて、深い／＼反省の念が、稻妻の如く閃めき初めた。彼女は先づ、自分は餘りに利己的でないかと考へた。而して又、之でも婦人の見識が保てるだらうかと問うて見た、すると偽り嫌ひな良心が、否！と猶豫もなく答へる。自分は何を怒つたかと問はれたら、如何答へる事が出来やう！私は章治さんが妹を愛するやうな様子を見て——而も自分丈は然う考へて——一時に赫としたのである。設令や、眞實二人が戀をしても、自分に怒る権利があらうか。愛し合ふも嫌ふのも、總て二人の自由である。夫を耻辱でも與へられたかのやうに、むら／＼となつた自分の心、あゝ私は嫉妬を起したのだ。是一つの憤しみなければ、千百の婦徳も一時に滅すると云ふ、思はしい嫉妬を起したのである。了 汝の同情 汝

加之、然く考へて見れば、章治は妹を愛して居ると云ふ證據もない……戀を見るのに證據詮義も妙なのだが、優しい言語遣ひやら、輝くやうな眼遣ひなどで、然う解するは淺果敢である、彼は私にも優しいでないか、意味ありさうな眼光は、尙且我にも向くではないか……

と斯う考へ直すと、彼女は章治の戀人は、寧ろ自分であるやうも思はれるのだ。而して又然う思ふと、看護の毎に己れに對する章治の舉止や、度を越したお近の親切振りや、此家を去らうと云つた時、章治の驚きの烈しかつた事などが、一々言外の意味を含んで居るやうだ。身體の傷は衣物で隠されるが、心の傷は、眼の色にも笑ふ口許にも、自つと現はれて来るものだ。松野子は而く我に問ひ我に答へて、怒つて立出た自分の所爲が、我にも濟まぬ心地がして來た。

あゝ悪かつたと心中で言つて、彼女は其處から踵を回した。元のやうに柴折戸を締めて、密と庭に入つて行くと、斜めに廣座敷の見える處で、磁りお近と行會つた。

「あッ松野さん」とお近は先づ呼掛けて、「私探しに來ましたよ。何處へ行つて來たの

です」

「裏の田圃へ……」と低聲で答へる。

「貴女何か怒つたのでせう」

「あら何怒る事があるものですか」

「ない事もありますまい、私だつて鳥渡妙に……」と言半したが話頭を轉じて、「夫は然うと、菊野さんの事に就いて、貴女に知らせなきやなりませんね、夫て探しに來たのですよ」

松野子は惘然として、

「ど如何したのです」

「今し方木田村さんが御入來になつてね。え、彼の郡長さん、菊野さんに話があるつて、二階に通つたんですがね、二人で何か言争つて居ますよ。貴女些時行つて見て下さいな」

松野子は忽ち顔色變へた。郡長父子に復讐するといふ、妹の語を想出したのである。

「ぢや私行つて見ませう。さア小母様も」

言捨て、彼女は縁側を上つた。お近も續いて入つたが、急込む松野子の袖を押へて、何やら耳語するのである。

(九)の四

二階の室には、老郡長と菊野子とが、穩かならぬ顔で坐つて居た。激語を交換した處と見えて、互ひに呼吸遣荒くなつて居るが、郡長は吸半しの巻煙を捨てると、傲然と返つた。

「併し乃公は、一つ貴女に聞かにならん。菊野さん、貴女は禮儀と云ふ事を御存知かの。昔からの諺にも、鳩に三枝の禮と云つてある。鳥てさへ其通り、禮儀と云ふものを知つて居るが、貴女は鳥の真似も出來んのかな。いやお氣の毒な事ぢや」

菊野子は屹となつた、が呻と睡を嚙下して、

「私なんか鳥にも劣るてせうが、夫て貴下は、私が鳥に劣る事を知らせる爲に、態々お入來になつたのですね」

「ば馬鹿な事を……誰が其様な事て態々來るか。いや來て呉れと頼まれても、乃公は貴女と話に來るやうな時間は有たん。河本君へ見舞の序でぢやから、教へて置かうと思つて話すのぢや」

「何を教へて下さるのですか」

「禮儀や義理を守る事ぢや」と郡長は忌々しげに叫んだ。「貴女なんかに嘲けられても、乃公は心に留めもせんかの、從來の關係上、多少貴女の前途を氣遣ふから云ふのぢや。恩のある者に對して……いや乃公は恩を被せるんぢやない、只其義理もあり、且縁故の深い者に對して冷評したり誹謗したり爲ては、貴女の爲になるまいと思つたからぢや」

菊野子は冷笑つた。其苦し氣な辯疏が、如何にも小氣味よく感じられるので。

「私何時冷評したてせう」

「冷評ぢやないか。いや何處が誹謗てないと云ふのか」と郡長は激して、「多代に寄越

した手紙は彼やア何ぢや、彼の手紙は如何思つて書かれたのか？ 鏡筒や衣類や小道具類を、直ぐ届けろと云ふのは聞えたが、姿見鏡や机なんかは呉れて遣ると書いたは何ぢや。嘸欲しからうとは何事ぢや。夫でも冷評でないか、いや愚弄ぢやないか」

「冷評でも愚弄でもありません。彼の姿見鏡は、多代子さんが欲しがつて在りながら、夫て呉れて進げると書いた迄です」

「夫が愚弄でなくて何ぢや。誰も貴女の道具なんか預つて、厄介にして置き度い事はないぞ。況んや貴女は、無断で乃公許を出たぢやないか。多少義理と云ふものを知つとるなら、先づ自分の失禮を詫言ひて、夫から引渡しを望むべき筈ぢや。然るに突如に手紙を寄越して、何故早く届けないかとは、何と云ふ失禮な申分ぢや。加之、欲しからうから呉れて遣る……宛然人を乞食扱ひにしとる。怪しからん事だぞ」

「ア其様に怒らなかつて」と尚笑ひを浮べて、「欲しがつて居るから進げると云ふのに、然う怒るに當らないぢやありませんか。貴下に言つたのぢやあるまいし、多代子さんに言つたのですもの……」

「黙んなさい」と郡長は一喝した。「こら菊野さん、人を見て物を言ふが可いぞ。此木田村は憚りながら従七位を戴いて、一郡の長をして居ますぞ。不肖ぢやあるが、娘を乞食扱ひにされて、黙つとるやうな人間ぢやない。貴女如きに威信を害されて、口を噤んで居られるものと思ふか」

「夫ては御自分で害するのは如何します」と菊野子は斬込んだ。

「何？何を言ふのか」

「お了解になりませんが」と眼を圓くする郡長を視て、「お了解がないなら、尙一度申しませう。貴下は威信々々と仰在るが、其威信と云ふものは、人に墮されては悪いが、自分からなら墮しても可いのか、と然うお聞き申したのです」

「其様な馬鹿な事があるか」と郡長は嘸附くやうに言つた。

「夫ぢや段々と申しますが、私をお賈めなさるより、先づ御自分を賈めるが可御座んせう」

「すると何か、乃公が自分で威信を墮しとる、と斯う云ふのぢやな。む、之やア聞物

ぢや。さッ如何云ふ譯か、言つて貰ひませう」

「申しませう」と菊野子は容姿を正して、「貴下は高藤さんと私の間柄を、如何云ふ事になすつたのです。貴下は、私に勧めて結婚を承諾させました。貴下は媒介人として在つしやる。今後は多代の妹と思つて、萬事世話を焼くと仰つた事、未だお忘れにはありませんまい。夫だのに高藤さんの勝手になつて……破談すると云や夫に従つて……私の爲に何一つ、力を添へて下すつた事がありますか。夫でも貴下は、義理を守れの、禮儀を正せよと云つて、人を責める資格があるんでせうか。婦人一人の心を殺して夫で威信の何のと言はれる義理ですか」

「いや素晴らしく斬込ひな、ハッハ、是は案外殿しいて」

郡長は事も無氣に笑つたが、内心辟易の體である。菊野子は勝誇つて、一層聲を鋭くした。

「さア答へて下さい。如何で御在ます、夫でも私はかりが惡くつて、貴下には缺點がないのですか」

「左様さな、併し物は見様に依りけりぢやからの」

郡長は愈々窮した。所在なさに煙草を燻らして、内心反響の刃を磨ぐかと思つた時、階段を上る足音がした。郡長も菊野子も眼を向けると、上つて来たのは茶器を携へた松野子である。

「やア松野さん久瀧」と郡長は救助船に逢つたやうに叫んだ。

「被來いまし」と松野子は手を突いて、「御無沙汰致しました。能うこと被來て下さいました」

「いや餘り能うは來んかな。實は御令妹にお目に掛つて、散々油を取られとつた處で、ハッハ、併し人間と云ふ奴は、得て自分ばかり善く見るものでな」

「夫は貴下丈けて御在ませう」と菊野子は冷笑つた。

「と云ふ處が即ち夫ぢや。いや大分お邪魔をした、今日は之でお暇をする」

「さア宜しいぢやありませんか。お茶を煮れましたから、御悠り遊ばして……」

「いや些と急ぎの用事もあるて、又來ます、松野さん些と遊びに來なさい」

郡長は周章と立上つた。娘の耻辱を雪ぐべく斬込み来て、腕くも返り撃になつたのだ。姉妹は玄關に送つて出たが、菊野子は門を出去る後姿を視て、さも残念らしく言つた。

「口惜しい事をしたわ。十分辱しめる意で居たのに、姉様の爲に逃して了つた」

「菊野さん、復讐をするなら、尙と立派にするが可いのよ」

「えッ、何故？」と眼を圓くした。

「何せ復讐すると云ふなら、立派にして見せるが可いのよ。口の前や手の先でなく、彼方が自然に恥るやうにね。和女、立派な人物を良人に有つて、高藤さんを見返してお遣りなさい。夫に越した復讐がありませんよ」

菊野子は熟と姉の顔を視たが、突如クルリと身を回して、匆々と奥に入つて行く。

(十)の二

「松野さん御勉強？」

「えッ……」と松野子は周章で讀半しの書狀を膝の下に隠し、後にイひひ近を見た。

其眼は狼狽の色に光つて、眼縁が紅く染つて居る。

九月初旬の朝の事で、庭木の梢を漏るゝ日光が、斜めに白く曇に落ちて、早や頭に冷つく微風が、何處からともなく葉擦の音を運んで来る。曾て章治が病室に使つた廣室、松野子は其處の縁側近く坐つて、書狀を讀んで居るのであつた。

「涼しくなりましたねえ」とも近を松野子の傍に坐つて、「苦しい〜と云つてる中に、また秋が来ました。月日の経つほど早いものはありませんね」

「はア、眞に早いものですね」と松野子は氣乗らぬ答へして、「小母機、今日は休みですが」

「え、久瀧で休みました。田の雑草も除り終になつたし、もう收穫まで用がないんだ

から、今後久時骨が休まりますよ」

「然うですか、あの何て御在ますか、今年は澤山收穫がありませんね」

「收穫？ あゝ收穫ですか、然うですねえ、上作と云ふ方ぢやないけれど、まあ平作にはなりませんよ」

「ぢや良い方ですね」

「他國には随分不作な處があるさうだから、平年作になりや結構ですよ」と言ひながら、松野子の膝に目をつけて、「松野さん、何處から手紙が来たのです」

「手紙……是ですか」と膝の下から引出して、其儘幾重にも折つて、「何でもないんですよ」

「然う隠さなくても可いぢやありませんか」

「あら隠したんぢやありませんよ」

「いゝえ隠しました。私が聲を掛けたら貴女喫驚して隠したてせう。いゝえね、此様な立入つた事言はれるものぢやありませんかね、然うして、私にも隠しなされるのを見

りや、必と善い事ぢやありません、貴女の利益にならない事だらう、と然う思つたから聞くのですよ」

「小母様、私が悪う御在ました」と松野子は忽ち折れた、「悪氣があつてぢやありませんから、何卒堪忍して下さい。お目に掛けても可御座んすけれど……餘り馬鹿々々しい物ですから」

「ホ、ホ、謝罪なくとも可御座んすよ。だけれども、貴女のお顔色が一時太く變つたから、容易でない事だらうと思つてね」

「まあ然うでしたか」と耻らふ面色になつて、「馬鹿々々しい手紙ですけれど、結婚の事が書いてありますから、夫で少し……」

「結婚の事？」とお近は眞顔になつて、「貴女の結婚の事ですか、誰が結婚しろと云ふのです」

「是は妹に來たのですが、小母様にもお話した宮様さんてお方ね」

「あの中尉のお方とか」

「はア其方です。富樫さんの妹さんから寄越したのだつて、今し方菊野さんが持つて來ましたの」

「な何と言つて來ました。讀んで聞かして下さい。さア松野さん讀んで下さい」

「讀まなくたつて可御座んすよ」

「いゝえ、宜い事はありません。さア何卒讀んで下さい」

「讀んだ處で爲方がないけど……あゝ可御座んす、ぢやア讀みませう」

松野子は歛くしやになつた手紙を展べて讀み始めた。前は菊野子が裂き除つて渡したさうで、何の秘密があつたか知らぬが、松野子に關する文言を、順序に記せば斯うである。

富樫中尉は豫て旅順攻圍軍に従うて居るが、客月中大尉に昇進した、百戰經來つて未だ一創を負はず、勇氣ますます加はつて、決死の攻撃をする時は、大抵此中隊長が參加するのである。と先づ大尉の現狀を記して、夫から、頃日の手紙に依ると、瀧美憲太郎君は、南山の激戦に名譽の死を遂げられたとの事、自分は近頃に至つて漸く知

つたが、何とも哀悼の辭がない、同君は自分とは友人であつた、且つ嚴父故中佐は、自分等の聯隊長として、非常の薰化を興へて呉れた。何れも尋常ならぬ間柄であるから、鄭重に弔詞を述べて呉れ。夫に就いて一つ汝(妹を指す)に相談するが、自分若し無事凱旋するを得たなら、憲太郎君の姉、松野子殿と結婚して、永久離るべからざる縁を結び、聊か故人を慰め度い、自分は平素同僚の品性、人物等に對し、大いに敬慕の念を有して居る……が如何だらう、見込があるまいか……。

と所謂軍人的の簡明直截な文句をば、其儘拔萃してあつた。

夫を松野子が讀終ると、お近は眉根に深い皺を寄せて、

「さア大層思込みましたね。夫て貴女、既う返書を出しましたか」

「いゝえ、之から返答しやうと思つて居ました」

「何と言つても遣りです。眞可、承知したとは言ひますまいね。夫とも其方へ嫌いのですか」

お近は何故か息窘ませ、膝押進めて鼻み掛ける。

「せはしをたれか念」
B. 何言つても遣りです。眞可、承知したと言ひますまいね。夫とも其方へ嫌いのですか」
お近は何故か息窘ませ、膝押進めて鼻み掛ける。

「私は断る意です」

松野子は猶豫もなく答へたが、心の中では、限りも知れぬ淋しさを覚えた。手紙は何とも書かれるものだが、是には儘に、大尉の誠意が見えるやうだ、が如何したものか、其誠意も左程嬉しい感じがせぬ。

けれども其手紙を見た時は、言ふに言はれぬ羞しさを感じて、顔は燃えるやうになり、思はず太息が漏れるのであつた。人に慕はれたか？と斯う思ふと、彼女は怪しく身が震へるので。

「断つて呉れますか」とも近は莞爾した、「ちや早く返答したら可いてせう。菊野さんにも然う言つて、直ぐ断つてお遣りなさいよ」

「はア然うしませう」

「真に早い方が可御座んすよ。斯う云ふ事は暖昧でなく、断乎言はなすやならぬのです、暖昧にして置くと、後で困る事が出て来ますよ」
「はア、直ぐ申しませう。私も暖昧な事が嫌ひですから、心配しずに在して下さい」

松野子
答へる

松野子は直ぐ断らうと決心して、早速其場を離れたが、何だか、暗い處にでも陥行くやうな、一種の恐怖に打たれたのである。

で、強ひて心を取直して、妹の居室へと歩を向けた。例の階段に片足かけると松野子は急に立感んで、屹と耳を欲てた、而して這ふやうに徐々と、細い段階子を上り詰めて、上り口の板の間にすんだ。

(十)の二

室の中では何やら諍ふ様子、激した中にも重々しく、力の籠つた章治の聲と、口早な、甲走つた菊野子の聲とが、一しきり混交になつて聞えたが、乃て双方、一時に確り口を噤んだ「氣取られたな」と心が注くと、松野子は何か大きな罪でも犯したやうな、恐怖と悲しみが起つて来るので、逃げ出さねばならぬ心地になる。が又、後の談話に心が残つて、立も去られず佇立して居る。

乃て章治が、